



緑の募金

緑のボランティア活動 助成セミナー 2018

報告書

東京都千代田区「弘済会館」
2018年2月16日（金）・17日（土）

主催
公益社団法人 国土緑化推進機構

共催
NPO 法人 森づくりフォーラム

緑のボランティア活動 助成セミナー 2018

報告書

● 趣旨・目的 ●

国土緑化運動は昭和 25 年の開始以来約 70 年が経過し、時代のニーズを踏まえ、新たな視点に立った緑化活動の展開が求められています。このため、シニア世代から親子世代まで幅広い層を、新しいコンテンツや従来とは異なる視点で森林づくり活動に巻き込み、主体的に企画運営の担い手となるよう工夫して成果をあげている先進的な活動事例を通じ、今後のボランティア活動を進めるに当たってのヒントやコツを共有する機会として「緑のボランティア活動 助成セミナー 2018」を開催しました。

● 参加対象 ●

森林づくり活動を実施している団体
森林づくり活動に関心のある企業の関係者等

● 開催日程 ●

2018 年 2 月 16 日（金）・17 日（土）

● 開催場所 ●

『弘済会館』（東京都千代田区） 萩（16 日）・梅（17 日）

2月16日(金)	13:00	開会挨拶 3	
		主催者挨拶 梶谷 辰哉 (公益社団法人 国土緑化推進機構 専務理事)	
	13:05	緑のボランティア活動 助成プログラム説明 4	
		青木 正篤 (公益社団法人 国土緑化推進機構 常務理事)	
		井上 達也 (公益社団法人 国土緑化推進機構 基金業務部長)	
	13:30	緑の募金 協力企業報告 ① ... ダイードリンコ (株) 6	
		源 隆志 (ダイードリンコ (株) 本社人事総務部総務グループ シニア・マネージャー)	
	13:50	緑の募金 協力企業報告 ② ... (株) ローソン 10	
		仙田 靖男 ((株) ローソン 事業サポート本部 環境社会共生・地域連携推進部)	
	14:10	休憩	
	14:25	緑のボランティア活動事例報告 ① ... 森づくり × コミュニティづくり 苫東・和みの森の挑戦 13	
		二瓶 奈津香 (自然体験活動指導者ネットワークえんりっと)	
		緑のボランティア活動事例報告 ② ... 森づくり × 企業や地域、学校、行政との連携を通じた取り組み 18	
		大和 文子 (NPO 環～WA 代表理事)	
		緑のボランティア活動事例報告 ③ ... 森づくり × 後継者育成と継続的な取り組みのポイント 23	
		寺川 裕子 (NPO 法人 里山倶楽部 理事)	
	15:25	休憩	
15:40	パネルディスカッション ... 企業や地域との連携、会員獲得、若返りのコツを探る 27		
	コーディネーター：宮本 英樹 (どさんこミュゼ (株) 代表取締役 (元 NPO 法人ねおす専務理事))		
	パネラー：二瓶 奈津香 (自然体験活動指導者ネットワークえんりっと)		
	大和 文子 (NPO 環～WA 代表理事)		
	寺川 裕子 (NPO 法人里山倶楽部 理事)		
17:00	1日目 閉会挨拶 日高 瑞記 (公益社団法人 国土緑化推進機構 募金企画部長) 35		
17:05	緑のボランティア活動ポスターセッションおよび「緑の募金」公募事業 個別相談会 36		
18:00	交流会 (場所：弘済会館 4階「菊」) 36		
2月17日(土)	09:30	オリエンテーション	
	09:45	話題提供 ① ... 「森林ボランティアの進化と変化」森林づくり活動実態調査 分析結果と今後 38	
		富井 久義 (筑波大学大学院)	
		話題提供 ② ... 「森林ボランティアの未来」 41	
		松村 正治 (NPO 法人よこはま里山研究所 理事長)	
	10:15	テーマ別セッショントークオリエンテーション・休憩	
	10:30	テーマ別セッショントーク～躍動する団体に共通するポテンシャルとは! ?～	
		テーマ ①：次世代に継ぐ森林づくりのための「企業・行政・地域との連携」 46	
		ファシリテーター&話題提供：丹羽 健司 (森の健康診断出前隊 代表)	
		テーマ ②：次世代に継ぐ森林づくりのための「後継者育成と継続的な取り組み」 48	
		ファシリテーター：鹿住 貴之 (認定 NPO 法人 JUON (樹恩) NETWORK 事務局長)	
	話題提供：松崎 和敬 (NPO 法人 いわきの森に親しむ会 副理事長)		
	テーマ ③：次世代に継ぐ森林づくりのための「新規参加者を獲得するためのポイント」 50		
	ファシリテーター：松村 正治 (NPO 法人よこはま里山研究所 理事長)		
	話題提供：小島 圭二 (多摩の森・大自然塾 鳩の巣協議会)		
12:00	休憩		
12:10	全体共有		
13:00	閉会挨拶 松井 一郎 (NPO 法人 森づくりフォーラム 理事) 52		
	関係者名簿 53		

主催者挨拶

梶谷 辰哉 (公益社団法人 国土緑化推進機構 専務理事)



今日は、緑のボランティア活動助成セミナー 2018 に大勢のご参加をいただきまして、大変ありがとうございます。また、日頃から国民参加の森林づくりにご尽力いただいておりますことに、厚く御礼を申し上げます。

2014年まで開催していたこの緑のボランティア活動報告会を、何年かぶりに開催することになりました。「緑の募金」を活動資金として活用する団体数がかここ数年横ばい傾向にあり、ボランティア団体の実態並びにそのニーズに対する調査を実施していたといった事情もあって、3年間は開催をしていないという状況でした。

これまでの国土緑化運動を振り返ってみますと、開始以来、約70年の時間が経過して、時代のニーズも大きく変化しているという中で、緑化運動につきましても、新たな視点にたった展開が求められている状況です。

緑の募金についても、従来はキャッチフレーズを「緑の募金で防ごう地球温暖化」として対応してきましたのですが、昨年からは日本の人工林資源の状況をふまえて、「植える緑化から使う緑化」というフレーズに変えました。ただ、これには賛否両論あり、わかりにくいという声もあったので、今年からは「使って育てる元気な森」として、少しわかりやすくしています。

今回のセミナーは、新しいコンテンツや従来とは異なる視点で活動を行なっているNPOの皆様の先進的な活動事例の詳細をご報告いただき、そうした事例を踏まえて今

後の活動を続けるにあたってのヒントを得る機会として開催する次第です。

本開催に関しては、NPO法人森づくりフォーラムとの共催で行う形になります。また、日頃から緑の募金にご協力いただいているダイードリンク様やローソン様といった企業の皆様からも、森づくりへの取り組みや募金への期待なども報告いただくことにしています。さらには、昨日2月15日から3月31日までの期間で公募を開始した、平成30年度の緑の募金、緑と水の森林ファンドの応募についても、個別相談会を行うという次第です。

今回のセミナーが、皆様が日頃苦勞されている諸問題の解決に少しでも役立つこと、緑の募金による募金参加の森づくりが時代のニーズを踏まえた新たな展開に繋がることを期待いたします。

ご報告をしていただく皆様と、コーディネーターを務めていただく宮本様に対しまして御礼申し上げます。冒頭のご挨拶とさせていただきます。今日はどうぞよろしくお願ひします。

緑のボランティア活動 助成プログラム説明

① 緑の募金

● 説明者

青木 正篤

(公益社団法人 国土緑化推進機構 常務理事)

● 対象となる活動

対象となる活動は、次の通りです。

- ① 森林ボランティア・里山保全団体・NPO 等による国内外の森を元気にする活動
- ② 地球の緑を増やし、地球温暖化防止や生物多様性保全に貢献する活動
- ③ 森づくりのリーダーを育てる活動
- ④ 森や里山で子どもたちを育むことができる活動

● 対象となる団体

支援の対象となる団体は従来と変わらず、次の通りです。

- ① 自主的、組織的な活動で事業を完遂できること。
- ② 交付金の使途に係る条件遵守が確実であること。
- ③ 営利を目的としない民間団体で、次の1から4の要件をすべて満たしていること。
 1. 定款、寄付行為に準ずる規約を有すること。
 2. 団体の意思を決定し、要望に係る活動を執行する組織が確立していること。
 3. 自ら経理し、監査することができる会計組織を有すること。
 4. 活動の本拠としての事務所を日本国内に有すること。

● 公募事業

今年度は、一般公募は総額枠を広げ、特定公募事業は若干減らす予定です。

・一般公募事業

従来と同様、「森林整備・緑化推進」(複数の都道府県にわたるなど広域的な見地から事業効果の波及が期待される活動)、と「国際緑化」(海外で行う活動)があり、年間1件あたりの助成の上限額が300万円になります。

・特定公募事業

特定公募事業の「災害に強い森づくり事業」は「(1) 国民参加による災害に強い森づくりタイプ」「(2) 山村住民と都市住民による森林整備と山村活性化タイプ」の2タイプがあり、それぞれ要件が異なります。標準事業費が200万円で、上限が300万円になります。

・都道府県緑推推薦事業

これが、今年度の新しい目玉となります。

昨年までは「ふるさとの森林再生事業」という名前で公募してきた事業でしたが、今年から「子どもたちの未来の森づくり事業」とし、新たに子どもたちの森林体験や環境教育等の活動、そうした活動のフィールドとなる森林整備への支援も行います。年間の助成額は、1事業あたり上限100万円です。



● 対象経費

昨年度までの募集要項は、対象条件についてダメな条件を念押ししていましたが、今年度からはあまり細かい条件は書いていません。ただし、前提はあくまでもボランティアによる活動です。ほとんどの事業を外注に丸投げして「セレモニーだけをやります」というのは、あまり相応しくありません。

事務費の扱いも、昨年度までは事業費の10%かつ5万円以内としていたのを、10%かつ10万円以内としました。つまり、人件費部分では以前よりはかなり緩和したとご理解いただきたいと思います。指導者経費はボランティア団体の構成員は対象にはならず、あくまで外部からの講師や指導者が対象ですので、ご注意ください。

● スケジュール

応募期間が2月15日～3月31日で、当日の消印を含みます。私たちが内容を整理・審査する中で、外部の第三者の意見を聞きながら、最終的には理事会での承認を経て通知をします。事業の活動期間は7月1日から翌6月30日までの1年間。活動が終わったら3か月以内の報告は厳守をしていただきたいと思います。

● 留意事項

参加者へ「この活動は緑の募金の支援で実施している」ことの周知をお願いしています。また、募金をただ活用するのではなく、自分たちも募金を呼びかけるといったことにも取り組んでいただきたいと思います。

● 応募要項

応募先がそれぞれの事業によって異なります。これを間違えると受け付けられませんので、間違いのないようにお願いします。

緑のボランティア活動 助成プログラム説明

② 緑と水の森林ファンド

● 説明者

井上 達也

(公益社団法人 国土緑化推進機構 基金業務部長)

● 緑と水の森林ファンドとは

緑と水の森林ファンドとは、国民参加の森づくり運動の推進のための事業を実施しているもので、昭和63年に国土緑化推進機構内に設立された「森林基金」を基に、平成23年に、緑と水の森林ファンドというかたちに移行し、その運用益において事業を展開しているものです。

● 緑の募金との違い

募金事業は主に、植えつけや下刈りといったハードが中心で、それに付随するイベントなどがついている事業が対象となります。一方でファンドはソフトオンリーの事業でも構わないという点が、大きな違いです。

● 対象事業

「普及啓発事業」「調査研究事業」「活動基盤整備事業」「国際交流事業」の4つの事項に沿うものをNPO団体で企画していただき、公募申請に上がってきたものを審査した上で、実施していただきます。

● 普及啓発事業の主な事業の内容

(森づくり運動への積極的な参加を促進するPR活動)

- ① 森林資源の整備・利用や森林と水の関わりなどについてのキャンペーンやシンポジウム等、各種イベントの企画・実施
- ② 木材利用の促進による森林循環の実現

● 調査研究事業の主な事業の内容

(森づくりに必要な調査や研究)

- ① 水土保持など森林の多面的機能
- ② 水資源の効率的利用及び森林資源の整備・利用
- ③ 学校林に関する調査研究
- ④ 森林の教育・文化的・医学的利用
- ⑤ 水力発電施設周辺環境保全

● 活動基盤整備事業の主な事業の内容

(農山村と都市住民の交流促進、森づくりの担い手の育成など活動基盤の整備)

- ① 森林づくりの担い手の育成

- ② 森林ボランティア活動の支援
- ③ 緑の少年団活動の支援
- ④ 学校林を活用した活動の支援

● 国際交流事業の主な事業の内容 (青少年国際交流などの支援)

- ① 緑化交流のための青少年の海外派遣
- ② 国内で開催される森林・環境に関する国際会議への支援
- ③ 海外向けPR冊子の作成

● 30年度の重点項目

- ① 「森林環境教育(森のようちえんを含む)」「震災復興支援」「地域材の利用」「地球温暖化防止と森林」「森林と水」「森林の利用」等の課題にポイントを置いた総合的・効率的な普及啓発
- ② 地域材の利用促進等山村資源の有効活用等による山村地域の活性化
- ③ リーダーの養成等の森林ボランティア活動支援
- ④ 学校林活動の推進など森林環境教育(森のようちえんを含む)等による次世代の育成
- ⑤ 森林の公益的機能、木質バイオマス、森林環境教育等に関する普及啓発・調査研究

● 対象となる団体

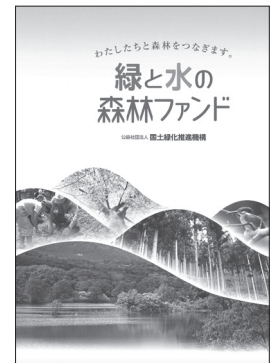
概ね緑の募金事業と同様です。ただし、報告は活動が終わったら2カ月以内ですので、厳守してください。

● スケジュール

緑の募金事業と同様です。

● 留意事項

参加者へ「緑と水の森林ファンド」助成事業であることを周知していただくとともに、事業の実施に伴って事前に放送・報道機関に情報提供を行うなどして「国民参加の森づくり」運動の普及や「緑の募金」の呼びかけに取り組んでいただきたいと思います。



ダイドードリンコ株式会社

● 発表者

源 隆志

(ダイドードリンコ(株) 本社人事総務部総務グループ
シニア・マネージャー)



ダイドールのグループ理念は 「人と、社会と、共に喜び、共に栄える」

最近、企業の立場からも、ESG投資（環境＝Environment、社会＝Social、企業統治＝Governanceに配慮している企業を重視・選別して行う投資）や、SDGs（持続可能な開発目標）などから、環境への配慮がCSRを超えた範囲でどんどん必要になってきています。当社の活動は、今日ご参加の皆様から比べると大したことは出来ていませんが、皆様に当社の活動を覚えておいていただけて、今後の当社の活動に繋がっていきたく思いますのでよろしくお願いします。

ダイドールグループは去年ホールディングスになり、大阪市北区に本社を構えています。社長は41歳と若く、従業員数はグループ全体で3600名ほどです。売上規模は1700億円くらいで推移しています。

当社グループは、「人と、社会と、共に喜び、共に栄える。その実現のためにDyDoグループは、ダイナミックにチャレンジを続ける」というグループ理念を掲げて活動をしています。お客様には「高い品質にいつもサプライズを添えて!」、従業員には「ダイナミックに働き、達成する喜びを!」、取引先には「次の成長ステージへ共にチャレンジ!」、社会には「人や社会との絆を大切に!」、株主には「継続的な企業価値向上を!」ということで、ステークホルダーの皆様の声を経営に活かしながら、豊かで元気な社会づくりに貢献していきたいと考えています。この中で、緑のボランティア活動に関係するのは、社会には「人や社会との絆を大切に!」という部分で、事業活動やコミュニティ活動を通じて、地域社会の活性化に貢献したいと考えています。

当社グループは、食品事業、医薬品関連事業、海外飲料事業なども行っていますが、メインはダイドードリンコ(株)という会社での国内飲料事業で、私もここに所属をしています。当社のビジネスモデルは変わっていて、自社工場を持っていません。本社部門で商品を企画し、それを委託工場につくっていただけて販売しています。自動販売機の販売比率が約80%を占めているので、ダイドードリンコは自動販売機が中心の会社と覚えていただければと思います。業界平均では自動販売機の販売比率がだいたい30%ですので、いかに当社の販売比率が高いかがお分かりいただけると思います。

ちなみに、「ダイドードリンコ」じゃないの?とよく言われますが、ダイドードリンコ「コ」です。ダイドードリンコは、「ダイナミックに活躍する、ドリンク仲間」という意味です。

緑の募金自動販売機を設置

当社の販売の中心となっている自動販売機には、いくつか特徴があります。

当社が業界初と言われているもので、自動販売機で商品を買ったらルーレットが回る当たりつき、ということがあります。「なかなか当たらないよ」という方もおられるかもしれませんが、是非チャレンジしていただければと思います。

方言等のおしゃべりをする自動販売機をいろいろと設置していて、例えば関西弁の自動販売機で商品を買おうと、「毎度」とか「おおきに」とかしゃべりますし、クリスマスに「メリークリスマス」としゃべったりする機能がついています。このように自動販売機にはいろんな言葉を吹き込

めるので、「その機能を使って何かできないか」といったご提案があれば、一緒に考えていきたいと思えます。

また、風力発電に協賛していることから、グリーン電力証書のシールも貼らせていただいています。

そして、当社は募金自販機を最初に始めた会社としても認知されています。緑の募金自動販売機は、商品を買うときに緑の募金ができる自動販売機です。

● 累計募金額は1億円超

緑の募金自動販売機のスキームは、図1の通りです。「緑の募金自販機を置いてもいいかな」という自動販売機の設置先のオーナー様と設置契約をして自動販売機を設置させていただき、売上げの一部を募金させていただいています。オーナー様には設置先の手数料をお支払するのですが、当社だけでなく募金先のオーナー様からも募金をいただき、それを一緒にして国土緑化推進機構に寄付をしています。この募金は、お客様が商品を買っていただいた一部ですので、当然、お客様の意思が見える形で届くというふうになっています。

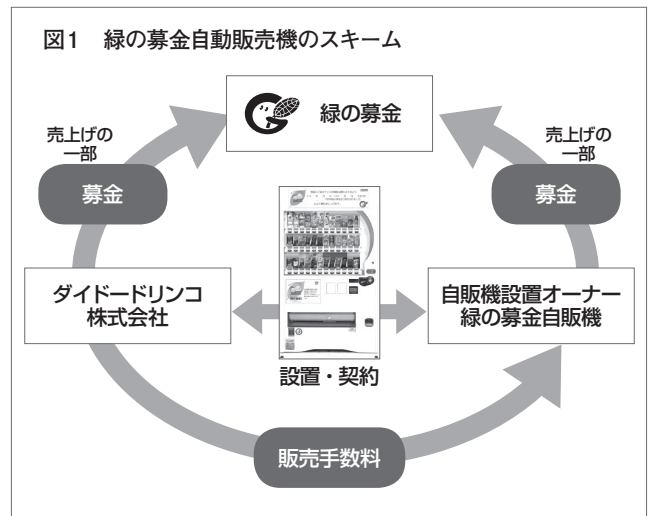
2001年10月10日に緑の募金自動販売機での募金を始めてから、累計募金額は1億3774万1348円(2018年1月22日現在。都道府県緑化推進委員会への募金を除く)となっています。この募金は、当社がしているというよりも、お客様の意思が伝わる、つながっているというふうにご考えていただければと思います。

● 自動販売機をつかって森林地域に恩返しを

緑の募金自動販売機が生まれた経緯を、簡単に説明させていただきます。

ダイードドリンクは、森で育まれた美味しい水、綺麗な水で飲料を製造しています。当社は無香料にこだわっているため、美味しい水がないと美味しい飲料は出来ません。そういうことから、森を大切にしたいのです。また自動販売機自体も、東京などの都心部には少なく、結構ローカルエリアという失礼ですが、森林が豊かなところでの設置が多いのです。

そうした森林や、森林が豊かな地域に、なんとか自動販売機を通じて恩返しができないか。いろいろ考えた中から、「自動販売機を緑の募金箱にしたらどうか。自動販売機で商品を買って募金ができる仕組みなら、お客様



も気軽に募金ができるし、喜んでいただけるのでは」というアイデアが出てきて、「森林の育成に興味のある団体様、オーナー様に提案してみよう」ということになりました。そうしたことで、皆様にお世話になりながら、現在では3000台以上を全国で展開させています。設置に協力いただいている方々には、この場を借りて、あらためて御礼申し上げたいと思います。

ダイードドリンクの緑化推進活動

ここからは、2001年の緑の募金開始以降の当社の緑化推進活動について、簡単にご報告させていただきます。

● 富士山記念植樹への参加

2002年には、国土緑化推進機構が実施された富士山の記念植樹に、有志社員とその家族で参加をさせていただきました。本日も後列に座っております齋藤和男・現東京営業部長は、緑の募金自動販売機をいろいろな団体様にご紹介させていただき台数を増やしていった当事者で



富士山での記念植樹（右が齋藤部長）

す。当社にとって緑の募金自動販売機の育ての親のような存在で、この活動にも参加しております。

● 長野県朝日村と里山契約を締結しての森林整備活動

また2003年から、長野県の朝日村という人口が1万人もいない村と里山契約を締結しています。村長をはじめとして、村の皆様には大変良くしていただいております。基金の提供だけではなく、「ダイードリンコ プライムの森」という名前をつけて社員による森林整備活動も行っており、私もよく参加をしています。



長野県朝日村での社員による森林整備活動



親子間伐材工作教室

汗を流しながら、実体験を通して森の大切さを学んでいるという活動で、15年以上継続しています。

● 親子間伐材工作教室

また朝日村では、実際の森林整備だけではなく、地元の親子を招待しての「親子間伐材工作教室」も開催しています。当社社員も含めて、だんだんと森林整備をする方の年齢が上がっていることもあって、「もっと若い人に興味を持ってもらいたい。間伐材を使って地元の親子に何か森に親しんでもらう機会が与えられないか」ということで提案させていただいたもので、村の施設を無償でお借りし、コースターやバターナイフ、箸などを、親子の共同作業でつくっていただき、森に接する機会を創出するという活動です。

ダイードリンコの社員も一緒になって活動を支援させていただいています。やはり自分たちでつくるという活動は子どもたちも喜んでくれていて、記念撮影では皆様に笑顔をいただけるのは嬉しいことです。

● 新入社員森林体験

最近の若い人は、なかなか森に入る経験がありません。そこで当社では、これまでは本社や事務所の中で行っていた新入社員研修を、長野県の地産地消材によるログハウスに宿泊し、そこで森林整備体験などをしてもらう予定にしています。そうすることで、当社の方でも世代の引き継ぎをしていきたいと考えています。

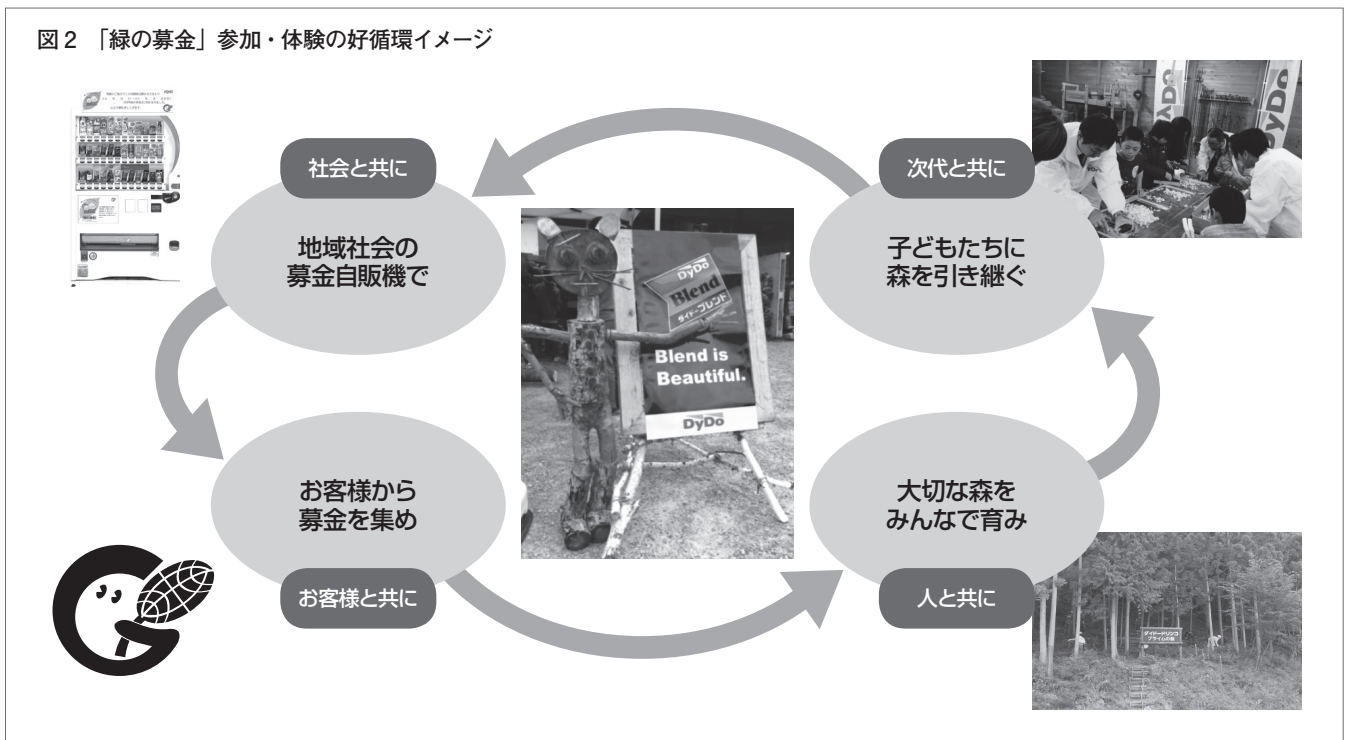
「社会」「お客様」「人」「次代」をブレンドさせるための好循環を

最後に、緑の募金とボランティア活動に期待したいことをまとめましたので、簡単に説明させていただきます。

冒頭にご紹介しましたグループ理念の下にグループビジョンがあり、「お客様と共に」「社会と共に」「次代と共に」「人と共に」それぞれでの活動を具現化していこうとしています。こうしたことから緑の募金と連携するとなりができるのかを考え、それが好循環していくイメージを図2のようにまとめてみました。やはり、緑の募金の参加体験を通じて、それを連動させていきたいということです。

「社会と共に」に関しては、お世話になっている緑の募金の自動販売機を地域社会にもっと増やし、「お客様と共に」に関しては、その地域社会のお客様から募金をもっといただき、「人と共に」に関しては、その募金を大切な森を皆で育むための資金にして、実際に人と共に森に入

図2 「緑の募金」参加・体験の好循環イメージ



って活動していこう、ということです。そして「次代と共に」ということで、当社では親子間伐材工作教室を行っていますが、子どもたちに森を引き継ぐような活動をもっと進めていきたいと思っています。そうすることによって、また自動販売機が増え、募金が増えるといった良い循環が出来るのではないかと考えています。

当社では“Blend is Beautiful”と言い、世界の各地から厳選した豆を上手くブレンドして美味しいコーヒーをつくっていこうとしています。それと同じように、やはり「社会」「お客様」「人」「次代」が上手くブレンドされることで、素晴らしい社会ができるのだと思います。そのためにも、当社としてはこういう好循環を作り出していきたいと考えています。

緑の募金自動販売機で当社飲料を購入していただくお客様は当然、緑の募金に賛同いただいたお客様です。特に当社は国内で飲料販売をしているので、お預かりした大切な募金を、まずは国内の森林整備にご活用いただきたいと考えています。さらに、子どもたちを含む地域の方々が参加する植樹などの森林整備活動、各種イベントと共に、次代に豊かな森を引き継いでいくための資金として、もっと有効活用していただければありがたいと思います。今日ご参加されている方々は当社より進んだ活動をされていると思いますが、当社としても、そこに少しでもご支援できるのではないかと考えています。

株式会社 ローソン

● 発表者

仙田 靖男

(株式会社ローソン 事業サポート本部 環境社会共生・地域連携推進部)



ローソングループの企業理念は「私たちは「みんなと暮らすマチ」を幸せにします。」

ローソンは1975年に設立して、間もなく45年、あと5年経つと50周年となります。従業員はグループで9403名、ローソン単体ですと約4500名です。ご承知の通り、ローソンはFCビジネスですので、オーナーやクルーをあわせると、大体17万人と一緒に仕事をしていることになります。

グループの企業理念は「私たちは“みんなと暮らすマチ”を幸せにします。」です。私たちはマチの問題を解決し、様々な要望にお応えすることでマチに暮らす人々をつなぎ、一人ひとりに笑顔が浮かぶマチづくりをすることで、マチの暮らしにとってはなくてはならない存在になることを目指しています。

またグループとして環境方針を立てており、その基本理念は、「私たちローソングループは、豊かな地球の恵みを次世代へ引き継ぐため、常に環境に配慮した事業活動を行うとともに地域社会との共生と持続可能な発展に向けて積極的に行動します。」としています。具体的には「① 低炭素社会の構築に向けて」「② 商品・サービス等の開発における配慮」「③ 社会貢献活動への積極的な参画」「④ 継続的な改善の実施」「⑤ 法令等の遵守」「⑥ コミュニケーションの推進」という6項目をもとに環境保全・社会貢献活動に取り組んでいます。また、先程ダイドリンコさんの発表にもありました通り、ローソングループとしてもSDGs（持続可能な開発目標）の17の目標に一生懸命取り組んでいる最中です。

ローソンでは募金活動を1992年から開始し、2013年6月から、募金の名称を包括的な「ローソングループ“マチの幸せ”募金」とし、「緑」と「子ども」を支援する4

つの公益団体に寄付しています。現在までで本部寄付金なども含め約90億5000万円の寄付金が集まっています。

4つの公益団体とは、「ローソンの緑の募金」（公益社団法人 国土緑化推進機構）、東北の復興支援から生まれた次世代リーダーの育成を目指す「TOMODACHI 募金」（公益財団法人 米日カウンシル—ジャパン）、東日本大震災で被災した学生を支援する奨学金制度の「夢を応援基金（東日本大震災奨学金制度）」（公益社団法人 Civic Force）、それから、ひとり親家庭のお子さんを支援する奨学金制度で「夢を応援基金（ひとり親家庭支援奨学金制度）」（一般財団法人 全国母子寡婦福祉団体協議会）です。そのうち「ローソン緑の募金」に対しては、累計で約40億7000万円を寄付しています。

「ローソン緑の募金」による助成事業

「ローソン緑の募金」は、学校緑化で年間60校、一般公募関連で20件、これまでの累計で約1370件の活動を助成、支援しており、私たちが参加しながら活動を行っています。その中から、私自身が参加した事例をいくつかご紹介します。

● 「げんきの森づくりと森の学習」

「げんきの森づくりと森の学習」は、北海道のNPO法人 森林遊びサポートセンターの皆様と一緒に実施させていただいている事業です。自然や森林を大切にする心を育むことを目的として、札幌市立藤の沢小学校の学校林を活用して、「げんきの森づくりと森や木々の学習」を継続して実施しています。

具体的には、毎年、地拵えを5年生が、植樹を2年生

が行うということで、卒業までには必ず全員が森林整備を経験するという内容です。指導は、森林遊びサポートセンターの方々が行っています。写真のとおり、エゾヤマザクラの苗は結構大きいのですが、これを2年生の皆さんが運んで植樹をします。我々は付き添いながらお手伝いをする感じです。苗木が倒れないように、支柱もつけて支えます。実は去年、シカの被害もずいぶんあって、今年は防御柵もつくりました。

● 「活樹祭～森が海を育む～ in 階上町」

「活樹祭～森が海を育む～ in 階上町」（三八みらいの森づくり協議会）は、今年はじめて参加させていただきました。

地元の3つの小学校から5・6年生が集まり、三八地方森林組合の方たちの指導のもと、まずは田代学校林で間伐を体験し、それから海に行って森の恵みについて説明を受け、最後は座学で1日を振り返り地域資源と森林を考えるという出前授業になっています。その中で、木材でつくった鉛筆を配ったりもしていて、非常に楽しく学べる林業体験プログラムになっていると思いました。

● 学校緑化事業（環境緑化モデル事業）

学校緑化事業（環境緑化モデル事業）は、（公社）国土緑化推進機構にご協力いただき、各県の緑化推進機構に窓口となっていていただいで学校を募集し、最終的には60校に絞って実施している事業です。内容については、木々の植樹はもちろん、それ以外にも既存の木々の手入れや整備、ビオトープの整備などを実施していただいています。

例えば、写真は東京都中野区立中野本郷小学校ですが、この学校には立派なグリーンガーデンがあり、学年ごとに核となる作物の栽培をとおして理科の実験で使用したり、給食の食材に活用するなどの取り組みを実施しています。支援した学校には式典を実施していただき、児童たちに実際に植栽をしてもらうなどしています。

● 「活樹祭～親子森林教室 in 小菅村 2017」

最後に、昨年初めて活動した事例ですが、「活樹祭～親子森林教室 in 小菅村 2017」は、NPO 法人樹木・環境ネットワーク協会や地元のNPO 法人多摩源流こすげ、そして（公社）国土緑化推進機構の皆様のご協力によって、ひとり親家庭の母子（総勢 27 名）を対象とした、森林体験を通じた一泊二日の環境教育プログラムを、山梨県小菅村のキャンプ場で実施しました。

初日は、まずは間伐体験の予定でしたが、当日は雨で



「げんきの森づくりと森の学習」（エゾヤマザクラの苗木を運ぶ2年生）



「活樹祭～森が海を育む～ in 階上町」



学校緑化事業（環境緑化モデル事業）
中野区立中野本郷小学校での児童による記念植栽とグリーンガーデン

したので、今回はNPO法人多摩源流こすげの方に伐っていただいた木をみんなで運び、自分の好きな枝を切って、自分たちでスプーンをつくってもらいました。

2日目は、「実は小菅村は多摩川の源流域で、東京や神奈川県で生活している人々が利用している水が生まれる場所だ」ということ、また「森と水の大切さ」「どうやって森を守るのか」を事前に伝えた上で、源流体験してもらいました。非常に流れに勢いのある沢だったのですが、そこをずぶ濡れになりながら楽しく登りました。最後にアンケートを取りましたが、やはり子どもたちは源流体験が一番楽しかったようです。

「子ども」と「緑」をキーワードに 今後も活動を継続・拡大

最後に、弊社の事業方針と、NPO団体への要望・期待としては、次の通りです。

＜ローソンとしての事業方針＞

- ① 「子ども」と「緑」をキーワードにした緑化事業の展開
- ② 加盟店オーナー、ローソン社員参加型の事業
- ③ 地元自治体、地域住民、地域の学校との連携事業
- ④ 活樹祭の継続、拡大

＜NPOへの要望・期待＞

- ① 森林ESDへの取り組み推進…将来を担う子どもたち体験型の環境教育の実践の場を提供・学校林の整備、緑の少年団の参加
- ② 地元自治体、地域住民との連携強化…地域からの一般募集実施、親子参加型
- ③ 事業参加者へ体験を通じた森林・環境保全に関する知識教育
- ④ 子どもたちにとっても魅力的な活動（自然体験・間伐材工作等）

要望・期待の①については、現在、学校林を持っている小学校が1642校ありますが、実際に活動されているのはそのうち35%しかないと聞いています。今回紹介させていただいた事例にも近いものがあったと思いますが、緑の少年団も含めて、森林分野での教育の一環として、我々も一緒に活動できればと思っています。

②については、現状でもほとんどの活動で行っていますが、もっと幅広い方とさらに連携していきたいと思っています。

③④については、弊社の方針にもあるように、「子ども」と「緑」をキーワードに、これまでも行ってきている活



活樹祭～親子森林教室 in 小菅村 2017
間伐材によるスプーンづくり（上）と源流体験（下）

樹祭の継続、拡大をしていきたいと考えています。地域の学校との連携事業に関しては、加盟店オーナー 5500人と、ローソン従業員 4500人がいますので、我々も気軽に参加できるような事業に参加させていただきたいと考えています。

今回紹介させていただいた事業以外でも、たくさんの団体の皆様にお世話になっています。これらの事業は全て、この会場におられる団体様のご協力なくしては出来ない事業ばかりです。これからも微力ながら、少しでもお役に立つように頑張りますので、引き続きよろしく願いいたします。

森づくり ×コミュニティづくり 苫東・和みの森の挑戦

● 報告者

二瓶 奈津香

(自然体験活動指導者ネットワークえんりっと)



なにをして過ごしても森づくりにつながる 「月に一度は森づくり！」

- 苫東・和みの森のコンセプトは
「森のコミュニティ・センター」

本日は、ただの主婦であった私が、10年前に子育てを通じて苫東・和みの森に出会い、ここにやってくるまでの話を交えつつ、苫東・和みの森の森づくり活動についてお話をさせていただきます。

苫東・和みの森は、千歳空港から車で30分、北海道苫小牧市の工業団地に隣接する2007年の全国植樹祭の跡地です。その跡地の森を守り育てていくこと、上手く活用していくことを目的に、翌2008年、土地の所有者である行政や企業、森を利用したいボランティア団体等が集まり、「苫東・和みの森運営協議会」が発足しました。事務局は、当時、苫小牧市内に広大な裏山を持っている幼稚園があり、その森で幼児から小学生までを対象にした自然体験活動を展開していた、NPO法人いぶり自然学校が担うことになりました。

運営協議会は、「本格的な森林整備を行うことも大切だが、この苫東・和みの森は、全国植樹祭という多くの人々のつながりから生まれたところであり、その息吹を活かして、普段の生活の中では出会うはずのない人同士でも、“森”というキーワードを通じてつながることが出来る。また、やってきたいろいろな人々が、それぞれ自分たちが楽しいと思える方向で森に関わることが出来る場所にしていこう」と、「森のコミュニティ・センター」というコンセプトを掲げ、「月に一度は森づくり！」という活動を始動しました。

- 森づくりのために人を集めるのではなく
森で過ごしたい人の場づくりの手段としての森づくり

「月に一度は森づくり！」(参加費：大人500円、小人300円)は、森のお手入れと称して、森の中で遊んだり、美味しいものを食べたり、ものづくりを楽しんだり、各々が休日を森の中で過ごす1日です。

「森づくりはこうやるべきだ」と固めたメニューを用意すると、専門性も高まり、森の整備も効率よく進んでいきますが、参加の敷居が高くなってしまいます。苫東・和みの森は、森に来るのは初めてという方にたくさん来てほしかったので、森づくりのために人を集めるのではなく、森で過ごしたい人たちの場づくりの手段として森づくりを利用するというやり方にしました。

- 「森のようちえん」が子育て層にジャストマッチ

事務局は、参加者がやってきて、楽しむきっかけになるような活動メニューをいくつか用意しました。その中に、森林整備という言葉から一番遠い所にいると思われた子育て層にターゲットを絞って、子育て層が参加しやすいように、「森のようちえん」を取り入れました。森の中で薪割りという遊びに没頭したり、「秘密基地をつくろう」と言って、森の中の枯れた木をどんどん出してきてそれを柱にして基地をつくったり、子どもたちが森の中で走り回るたびに下草が目一杯踏みしめられたり。そんなふうに、子どもたちが森の中で遊べば遊ぶほど、森の手入れがされていくという仕組みを、「森のようちえん」としてつくりました。

この「森のようちえん」は、子どもの自然体験という側面から森に興味を持っているものの、自分たちだけでは



子どもが森のなかで遊ばば遊ぶほど森の手入れがされていく
「森のようちえん」



美味しいものを食べるのも DIY の練習をするのも、その燃料や素材は森から。
なにを楽しむにしても、それが森づくりにつながる

森に行ってもどうしたらよいかわからないというような子育て層に上手くマッチしました。子どもの自然体験の入り口を見つけにやってきた親子たちは、子どもたちが森の中を駆け回って遊んで、木に登って、秘密基地をつかって、季節の森の恵を食べたりして過ごします。子どもたちは大人たちに教わったり真似をしたりして、ノコギリやマサカリ、ドリルなども上手く使いこなせるようになり、焚き火も起こせるようになり、遊びの中でどんどんいろいろなことが出来るようになっていくことに大喜びでした。また、子どもに体験をさせたくて集まってきたお父さんお母さんたち自身も、子どもたちの様子を眺めたり焚き火の番をしながらおしゃべりを楽しんだり、薪棚をつくるおじさんの作業を手伝いながら道具の使い方を教わったり、それぞれ自分の楽しみ方を子どもとは別に見つけて過ごすことができ、そのことが、ただ我が子の付き添いで森に来るのではなく、お父さんお母さん自身が「また森に来たい」と思うことにつながっていきました。

● 口コミで参加者が増え、リピーターも獲得

その他の活動メニューも、それぞれが休んだり遊んだり、食べたりおしゃべりをしたりしています。ただ、焚き火でなにか炙って食べるためには枯損木を運び出してきて、割って薪にする作業が必要ですし、クラフトを楽しむためには、まず間伐作業を手伝って材料を入手しなくてはなりません。「森のようちえん」と同じように、なにをして過ごしても小さな森づくりにつながるという仕組みになっています。

森にやってきた参加者たちは、お友だちや親戚にも声を掛けて誘ってくれるようになり、その口コミにより、参加者はどんどん増えていきました。最初は10名ほどしか集まらないこともあったのですが、いまは平均すると30～40名ぐらい、多い時は70～80名が集まるようになっています。素人ではありますが、たくさんの手が定期的に入ることで、下草は刈らずとも固く踏みしめられ、かかり木や枯損木が森の中からどんどん運び出され、風通しが良い光の差す空間が、少しずつ広がっていきました。森づくりの活動メニューの1つとして続けてきた、半割の丸太をつくってつなげる木道づくりも、10年の歳月をかけて昨年、スタート地点からゴール地点へと到達しました。

ただ楽しいだけでなく、「自分たちの遊ぶ森を自分たちでつくっている」「自分たちがささやかながら森づくりに貢献できている」という気持ちになれることが、参加者同士の一致団結やモチベーションの向上につながり、リピーター獲得に結びついていったように感じています。さらに

は、「森のようちえん」を取り入れ、子育て層をターゲットにした中で、参加している子どもたちが大きくなって森遊びを卒業したとしても、新たに次の年頃の幼児たちがやってきて、毎年少しずつ世代交代を繰り返して続けていくというのも、ここでの活動の特徴と言えます。これは参加者の口コミのほか、事務局を担っている、いぶり自然学校が、森遊び体験を展開している市内の街中の幼稚園で、毎年新しく入ってくる園児とその家族へ、「こっちの森へも遊びにおいでよ」と、上手くアプローチ出来ていることも1つの理由となっています。

参加者から運営側へ 新たな協力団体として活動を開始

● 子育て主婦から有償ボランティアスタッフに

「月に一度は森づくり!」に参加者が増え、その活動が大きくなっていくのを運営事務局がどのように支えていったかという、実はその規模自体は小さなもので、会の発足当時からほぼ変わっていません。毎回の「月に一度は森づくり!」の活動にあたって、事務局は参加者が楽しむきっかけになるようなメニューをいくつか用意しますが、基本的には最低限必要な場所と道具の準備をして、当日の安全管理を行うのみです。活動当日は、事務局が主導はするものの、そこから先は、参加者に手も口もたくさん動かしてもらって、参加者自身が活動をつくり上げていくような進め方をしています。そうすることで、1から10までの全てを事務局が担う必要はなく、負担は小さく済んでいます。

そして、このように参加者が主体的に関わっていく仕組みで活動を続けていったところ、やがてそれぞれの活動を積極的に引っ張ってくれるリーダー的な人が現れてきたり、苦東・和みの森の活動に賛同、協働してくれるような人や団体が生まれはじめ、運営を周りからサポートしてくれるようになりました。その1人が、森とは全く縁がなく生きてきた子育て中の主婦であった私です。

私は10年前、当時いぶり自然学校が子どもの自然体験を展開していた広大な裏山を持つ幼稚園に我が子を通わせていました。私自身は、自然や森の中での経験はまるっきりなくて、ただ最初は、英語や体操を習わせるような感覚で子どもを森遊び体験に参加させていました。子どもは毎回草まみれ、泥まみれで下着までドロドロ。でも、ものすごく笑顔で帰ってくるのを見て、「子どもにはやはり自然体験が必要だ」と思っていた時に、いぶり自然学校

から「苦東・和みの森というところで、月に一度は森づくり!という活動が始まるから、どうですか」というお誘いを受けて、第1回の活動に参加しました。

「月に一度は森づくり!」は、森づくりという目指すものがあり、子どもが遊びを通じていろいろな作業体験を出来るということがとても魅力的でした。小さな子どもから、おじいちゃんおばあちゃんまで、森で出会ったいろいろな人たちと関わり合いながら、ここで初めての体験を積み重ね、さまざまなことができるようになっていく様子を見て、「これは間違いなく子どもの力を育てるものだ」と感じました。

そうして私は、「月に一度は森づくり!」の活動に親子ではまり込み、熱心に通いつめました。その後、私の熱烈さが届いたのか、事務局からお声がけをいただいて、有償の事務局ボランティアスタッフになりました。プログラムでの情報発信、活動募集・集約、会員名簿の管理、報告書の作成など、パソコンがあれば在宅でも、子どもがいても、隙間時間を利用して出来る作業をしておりました。当時私は、0歳、2歳、4歳の子どもがいて、「子どもを預けて働く場」か「育児に専念」かの選択に悩んでいるところでしたので、時間や場所に縛られず、家で好きな時に作業が出来たり、森での活動の時や打ち合わせの時に子どもを連れてきてもOKというこのスタンスは、とても画期的でありがたかったです。

● 森×子育てをもっと面白く展開できるのではと 子育て中のお母さんによる団体「えんりっ」と設立

その後、2年ほど事務局のボランティアスタッフとして「月に一度は森づくり!」に関わっていたのですが、その間に森にやってくるお母さんの中に、私と同じように仕事と子育ての間で悩んでいる方が何人かいることを知り、その森で出会った同じ悩みを持つお母さん同士で、「この子連れで働くというスタイルを、なにか面白くできないかな」と、ほんやり考えていました。そんな時にちょうど、市内で自然体験指導者養成講習があり、この何人かのお母さんたちと受講しました。自分の子育てに役立ちそうだと思って受講したのですが、その資格を取得したことが、私たちの1つの大きな転機になりました。

資格を取得後、「この指導者資格を、せっかくだから苦東・和みの森でなにか活かしたいね」という何気ない話から、「いま持っている私たちのポテンシャル、例えば自然体験指導者活動資格があって、森のお手入れや枯損木を活用したクラフトのアイデア、苦東・和みの森という空間素材、そして森の中で何年も過ごしてきた私たちだけ

らこそ伝えられる力、それらを活かして、これまで自分たちが楽しんできた自然体験を、これからは教える側、伝える側になって、まだ森と出会っていない地域の住人が森と出会うきっかけをつくる活動をつくっていこう。もちろん、小さな子どもを横に連れて活動するお母さんスタッフとして」という感じで盛り上がり、苫東・和みの森運営協議会に協働していく団体として、“自然体験活動指導者ネットワークえんりっと”を立ち上げることにしました。当初、苫東・和みの森が森林整備から一番遠いところにいる子育て層にアプローチしてきたことを引き継いで、子育て真っ只中である私たちが、森×子育てをもっと面白く展開していけるのではないかと思いついたわけです。

● 自分たちの実体験から、森の良さ、面白さを発信

「えんりっと」を立ち上げて、まずは苫東・和みの森を知ってもらおう宣伝活動として、森の循環や森のお手入れの必要性や森を知ってもらおうお話をしつつ、苫東・和みの森のお手入れからでた木の枝を使って工作をする出前授業を企画し、市内の小中学校の「学校親子レクリエーション」に提案しました。これが上手く隙間ビジネスとして、市内にたくさんいた学級レクリエーションのネタに悩んでいる学級やお母さんたちの要望にマッチしました。ま

た、新しいレクリエーションのネタに悩んでいる子供会や町内会、市内の企業の顧客サービスイベントなどからも声が掛かるようになりました。

私たち「えんりっと」は、自分たちが子育て中のお母さんなので、参加する親子側の目線や気持ちがよく分かるというのが強みです。参加する親子、特にお母さんの、「これっていいね」をキャッチするのが得意です。そこを上手く利用したクラフトでお母さんの懐に入り込んで、そこで森の面白さ、森の良さを自分たちの実体験から思いを込めて伝えることができます。

すると、狙い通りに出前授業をきっかけに森に興味を持ってくれる人が出てきました。そういった方々には、「月に一度は森づくり！」の活動をご案内しています。そんな中で、「仲間内だけで遊びに行ってみただけで、どうしたら良いかわからなかった。サポートしてほしい」という声も出てきました。私たちはその声に応じて、そうしたグループのために、森で楽しく過ごすピクニック企画を立て、当日は森の中に快適なピクニック準備を整えて出迎え、森をガイドしたり、遊び方を提案したりするという活動もはじめました。

● 100人以上を対象としたプログラム提供も可能に

「えんりっと」が苫東・和みの森の活動を盛り立てて行く一方で、現在、苫東・和みの森事務局は、私のあとの3代目のお母さんがボランティアスタッフとして切り盛りしています。また、「月に一度は森づくり！」の活動から新たに「えんりっと」に加わったお母さんもいますし、「森の中に自主保育の会をつくりたい」と動き始めている方もいます。

「森林整備はあまり分からないけれど大工仕事なら得意です」「子どもの相手なら任せてください」とか、自分の得意なもので苫東・和みの森に協力してくれる人たちも何人もいます。その結果、苫東・和みの森は、協働してくれる団体や個人が集まって力を合わせることで、数年前からは大型の教育旅行団体や、150人くらいの修学旅行生を受け入れての森づくり体験プログラムの提供を成功させています。

「森のコミュニティセンター」の仕組みで森だけではなく人も育つ

苫東・和みの森運営協議会は、「運営の組織を大きくすると、安定はするが、組織維持に手間やコストが掛かってしまい、本来やりたい事業に掛けるべき時間や労力が



森の手入れから出る小枝などの「森のかけら」を使ったクラフトで、市内小中学校の「親子学級レク」町内会・子供会のレクなどへ出前授業

奪われてしまう。組織を大きくしていくのではなく、必要に応じて周りには協力者たちとその場面ごとに繋がって、共同するやり方が互いに個々の強みを活かせる」と考えています。

苦東・和みの森は、森づくりのために人を集めるのではなく、森で過ごしたい人たちの場づくり・コミュニティづくりの方法として、森づくりを利用してきました。森づくりを通じて、「人と森、人と人のつながるコミュニティセンター」のような場所を目指してきたら、これまで森に縁のなかった人が集まって、新たな出会いの中で化学反応が起き、新しい視点での森への関わり方が生まれ、小さなコミュニティビジネスが生まれたり、運営協議会を周りから囲んで協力してくれる人材を得ることができたり、と繋がっていきました。苦東・和みの森では、森づくりを通じて森だけではなく、人も育ってきていると感じています。

森×子育てをキーワードに活動を続けて、「えんりっと」は今年で活動6年目に入りました。出前授業や、そこから森へ行ってみたい人をサポートする活動を続けていたら、今度は豊かな森林を持つ隣町の教育委員会が私たちの活動に興味を持ってくれました。そこで一昨年からは、この隣町の町有林を親子が楽しむ場所にすることを目指して、親子森遊びの生涯学習講座の企画・指導の仕事をお願いしています。また昨年からは、これまで森に縁がなかった子どもというところを掘り下げ、障害を抱える子どもたちへのアプローチを始めたところ。まだ森と出会っていない子どもと森をつなぐということは、ニッチではありますが間違いなく需要があると感じています。

インドアに育ち、森からものすごく遠いところで生きてきた、ただの子育て主婦だった私が、0歳の末っ子をおんぶして、2歳の娘と4歳の息子の手を引いて、初めて苦東・和みの森に行ってから10年が経ちました。そこで森が与えてくれる恩恵を知り、たくさんの人に出会って学び、豊かな時間を過ごし、私なりの森との関わり方を見つけました。さらには、仲間たちと一緒に森を発信する、森をつなぐという、ささやかながらも自分たちが活躍できる場をつくり出し、とうとうこのような場所でお話しをさせてもらうところまでやってきました。私は、森林整備の専門的なことや難しいことは分かりませんし、出来ません。そうしたところは専門家や得意な方に頼りながら、私自身は、森に縁がなかった人たちが森にやって来るきっかけをつくるという立場から、今後も苦東・和みの森づくりに関わっていくつもりです。

森と出会う人が増えれば、森のために出来ることが増えていきます。様々な人が森とつながることで、様々な方

向から新しい視点での森づくりがなされていくと考えています。そうなる中で、10～20年後の苦東・和みの森がどうなっていくのか、運営協議会も周りを取り囲んでいる私たちも、とても楽しみにしています。苦東・和みの森のこの10年の歩みが、どこかの活動の参考になれば光栄です。

森づくり×企業や地域、 学校、行政との連携を 通じた取り組み

● 報告者

大和 文子

(NPO 環～WA 代表理事)



茨城県の平地林が抱える課題と 「私たちができること」

私たち「NPO 環～WA」は、都道府県別の人気最下位の茨城県のと真ん中、茨城県東茨城郡茨城町という3つの茨城がつく茨城町で活動しています。この茨城町は、2015年にラムサール条約に登録され、しじみで有名な汽水湖「酒沼（ひぬま）」がある町です。

茨城町の山林は、99.9%が個人所有の民有林です。残りの0.1%は「世代が変わって遺産相続もしたくない。だから町が引き取ってよ」という部分ですから、ほとんどが個人所有です。また、そういった個人所有の山林の中でも、町指定や県指定の緑地があったりします。私たちのフィールドは、そういった個人所有の民有林、また町指定の史跡「小幡城」や県指定の緑地である「矢連緑地環境保全地域」なども合わせての6haです。酒沼への流入河川流域で、いわゆる平地林や農地がたくさんある場所です。

元々山林だったところを、少しずつ開拓して農地にしていった長い歴史があるのですが、農地は人間と森の間にあって、人間の命をつなぐ場所です。こういった山林と



平地林と農地が多い「NPO 環～WA」の里山フィールド

農地をどう継承していくかが、私たちがフィールドを持っている茨城県の大きな課題です。なので私たちも、「森」「農地」「水辺」での取り組みを、保全と人づくりといったテーマで進めています。

私は、何百年も続く農家の生まれです。両親は、山に入って整備をしたりということも30年程前まではしていました。私の4姉妹の一番上の姉が旦那さんと農家を継いでくれたのですが、飼料や肥料は購入するという現代農業のスタイルになり、山から資源や資材を採ることをしなくなりました。周辺地域もほとんどが、それに近い農業のスタイルです。そして、私の父の時代は集落に23軒の専業農家があったのですが、いまはたったの2軒しかありません。

このように、「農地・暮らしと山林の循環が消滅」したことによって、「過去数十年の管理放置による荒廃」が引き起こっています。つまり山に人が入っていませんから、「山林整備技術継承の消滅」が起こっています。親が山に行っていないから、子の世代、孫の世代にも継承されていません。山には入らなければそれを守ろうと意識するはずもなく、「自然資源継承の意識低下」も起こっています。これは、皆さんが思うよりもずっと深刻な課題です。

一方で、近年台頭してきているのが大型の太陽光発電（メガソーラー）で、電気を売るために大規模に森林を伐採しています。それによって、確かに「一世代分の現金収入」「山林管理責任からの開放」という短期的な利益を得ることができますから、業者は「これで山主さんたちも大喜びです」と言っています。しかし、山林が一度壊滅してしまったら、それを戻すには大変な労力がかかってしまうのです。

そうした状況の中、私たちに出来ることとして非常に

重要だと思っているのは、「経済社会の仕組み・方向性は、いまのままでいいんだろうか…」というところに切り込んでいくことです。おそらく、「森林保全をしましょう。ボランティアでなんとかやりましょう」では、日本は変わっていきません。私は以前、環境コンサルの仕事をしていたのですが、このことはいろんな意味で直に感じていたところでした。

「NPO 環～WA」の活動

● 「NPO 環～WA」の3つの目的と4つの目標

「NPO 環～WA」の設立は2013年4月で、今年5年目になります。

団体の目的は次の3つです。

目的① 生態系の調和を保ち低炭素な暮らし方を見出す

目的② 地域を守り育てる人材を育成する

目的③ 持続可能な循環型地域社会に寄与する

まあきれいな言葉を並べていて、非常に難しく、広域でとても遠いように見えますが、足元からコツコツとやっていくことが大事ですし、きっとそこからしか前に進んでいくことはできません。一人ひとりのこういった積み重ねが、いつしか波をつくるように社会を変えていくのではないかと信じて、いろんな取り組みをしています。

目標は次の4つです。

① 里山を再生する

もうほとんど行われていない「植える」「育てる」「使う」の循環を、しっかりとつくっていくことです。私たちは、山林と果樹園やクリ畑や有機農地を含めた6haで、里山を再生する循環モデルをつくっています。

② 里山資源利用を促進し炭素を循環させる

現在は低炭素とか省エネとか、いろいろ言われていますが、私たちは森と農地、そして人の暮らしがあるフィールドでできるだけ炭素を循環させようという取り組みにチャレンジをしています。人間活動で排出された二酸化炭素を吸収した森が成長し、その過程で行う間伐や枝払いによって出てきたものをエネルギーとして、畑で資材として、もちろん建材として使っていく。暮らしの中で、地域の中で、しっかりと循環させていこうという取り組みです。

③ 地域人育成に向け環境教育の仕組みをつくる

これは非常に難しいことで、先ほど発表があった苦東・和みの森の実践は、もう私たちの目標の上のステージに行かれていて素晴らしいなと思いました。

茨城県はなんでもあるので環境への危機感が薄くて、

考え方がわりと緩かったりします。学校や住まいの周辺に田んぼや菜園があって、ジャガイモ掘りとか田んぼで稲刈りといった農業体験はわりと昔から行われているのですが、環境教育がそこから先に進まないのです。学校教育の中に年次ごとに発展していくような教育プログラムとか、「地域資源を利用することで地域の経済に関わっていきんだよ」といった、もう少し地域社会とつながっていくような教育プログラムが、なかなか進んでいけないので、ここに私たちがなんとか斬り込んでいけないかなと試行錯誤しているところでした。

④ 地域資源循環型経済の仕組みをつくる

農地がたくさんあるので作物で経済をつくっていくことが基盤になる町ですが、山林もあるので、これをしっかりと使って循環させることで農地からも山林からも収益が得られるようにしようという経済の循環モデルです。そのことによって、「農林業の担い手不足の現状を打破できます」、また、「外からエネルギーや資材・資源を買ってばかりいる地域経済社会から卒業しましょう」ということを訴えながら、さまざまな取り組みをしています。

● 「NPO 環～WA」の活動プログラム

私たちの活動プログラムは次の通りです。

- 里山整備（毎月定期活動／随時整備）：保全面積：スギヒノキ林、竹林、雑木林（合計約6ha）
- 里山循環型農業（毎週定期活動／随時作業）：無農薬、手づくり肥料（落ち葉堆肥、竹パウダー、もみ殻、もみ殻燻炭）による野菜や果樹の栽培
- 環境教育（毎月：茨城東高校／毎年：茨城大学、季節ごと：世田谷区つくし保育園／その他随時）：学校、企業、自治体、自治会を対象に目的に応じてオリジナルプログラムを企画提供
- 普及啓発（毎年：明治神宮、茨城町、つくば／随時）：アースデイ@明治神宮、環境展、県内自治体・企業主のイベントへの出展等
- 潤沼でのネイチャーガイド、観察会、水質調査（随時）：流域全体での保全を呼びかけるプログラム
- 史跡等保全（年に複数回）：「小幡城跡」「矢連緑地環境保全地域」の整備
- 被災地支援（随時）：東日本大震災、関東・東北豪雨、熊本地震

定期活動としては月に1回、技術指導も含めた里山整備をしています。そうすると木質のものがいろいろ出てきますから、それを薪やペレットといったエネルギー源にしている、定期活動のお昼のご飯は薪やペレットを燃料に



約6haの里山を整備



ペレットを製造して普及啓発の一環として利用



新しい森づくり (0.7ha。植樹本数 430本)



茨城東高校での実践学習

して調理しています。

活動が5年目になると、新しい森になったところもあります。例えば、「緑の募金」にご協力いただいて、シノダケとクズがボサボサと密生していた0.7haの荒地を2年かけて整地し、いろいろな方と苗木を植えることで新しい森が生まれました。

また、森から出るものを使って肥料をつくったり、間伐材や竹を使って小屋をつくったりといった取り組みも継続的に行っています。また、こうした活動を通じて、農業に興味がある方に里山保全にも興味を持ってもらうような仕組みづくりも行っています。

● 学校での環境教育は実践学習

学校での環境教育は、茨城東高校で毎月、茨城大学で毎年行っています。また保育園や幼稚園とは、緑の募金事業の一部で協力連携させていただいています。

茨城県東高校での毎月1回の授業は学校林での実習事業なのですが、今年で4年目になります。先生でさえ自分たちの学校に学校林があることを知らなかったようなところから始めた授業です。

まず、「自分たちの学校の周辺はどんな環境なのか」を知るために散策することから始め、学校林を見て「自分たちはなにをやらなければならないのか」「なにをやりたいのか」「授業でどんな楽しみをつくりたいのか」を学生たちに立案してもらいます。そこから、私たちがどういった体制で、どんなことが出来るのかを最終的に決めて年間計画を立て実践しています。

実践型学習には、次のようなテーマを掲げています。

- [1] 森林整備と森林資源利用の実践
- [2] 木質ペレット・薪づくりと火おこし体験～熱エネルギーのメカニズム学習
- [3] お金の流れが地域をつくる～経済地域資源利用による地域経済への効果
- [4] 自然循環と生態系～地域資源利用による農業、気候変動と農業
- [5] 今後の人生で経験を活かす

森林整備だけではなく、例えば間伐材を搬出してペレットにするといった、実際に経済効果のあるものまで体験しています。農業体験もします。火おこし体験をしながら、エネルギーとはどういうものかというメカニズムを学んだりもします。その火でご飯をつくることで、自分たち人間が自然界とつながる真ん中にあるのが「エネルギー」「水」「食」なんだということを知るわけです。

「NPO 環～WA」の運営体制と連携

これらの事業を行っていく上で、足りない技術を補ってもらうために企業等と連携しています。

● さまざまなバックボーンを持つ運営体制

私たちは会員制ではありません。毎月「この日にこういった活動をしますよ」と SNS で参加者を呼びかけ、少ない時は 10 人弱、多い時は 30 人くらい集まります。大きなイベント時は、最大で 90 人ほどが参加してくれました。

そうした活動を支える運営メンバーは、森の安全指導ができるまでの技術をもっている者、学校の先生など、様々なバックグラウンドを持っています。そのため、いろんなアイデアが出て、バリエーションのある多様な活動ができています。

● 2016 年までに 72 団体と連携

そして、私たちが連携・協働した団体は、2016 年までに 4 年間で 72 団体、活動回数は累計で 225 回でした。

地域住民はもちろんのこと、都市部の団体が「NPO 環

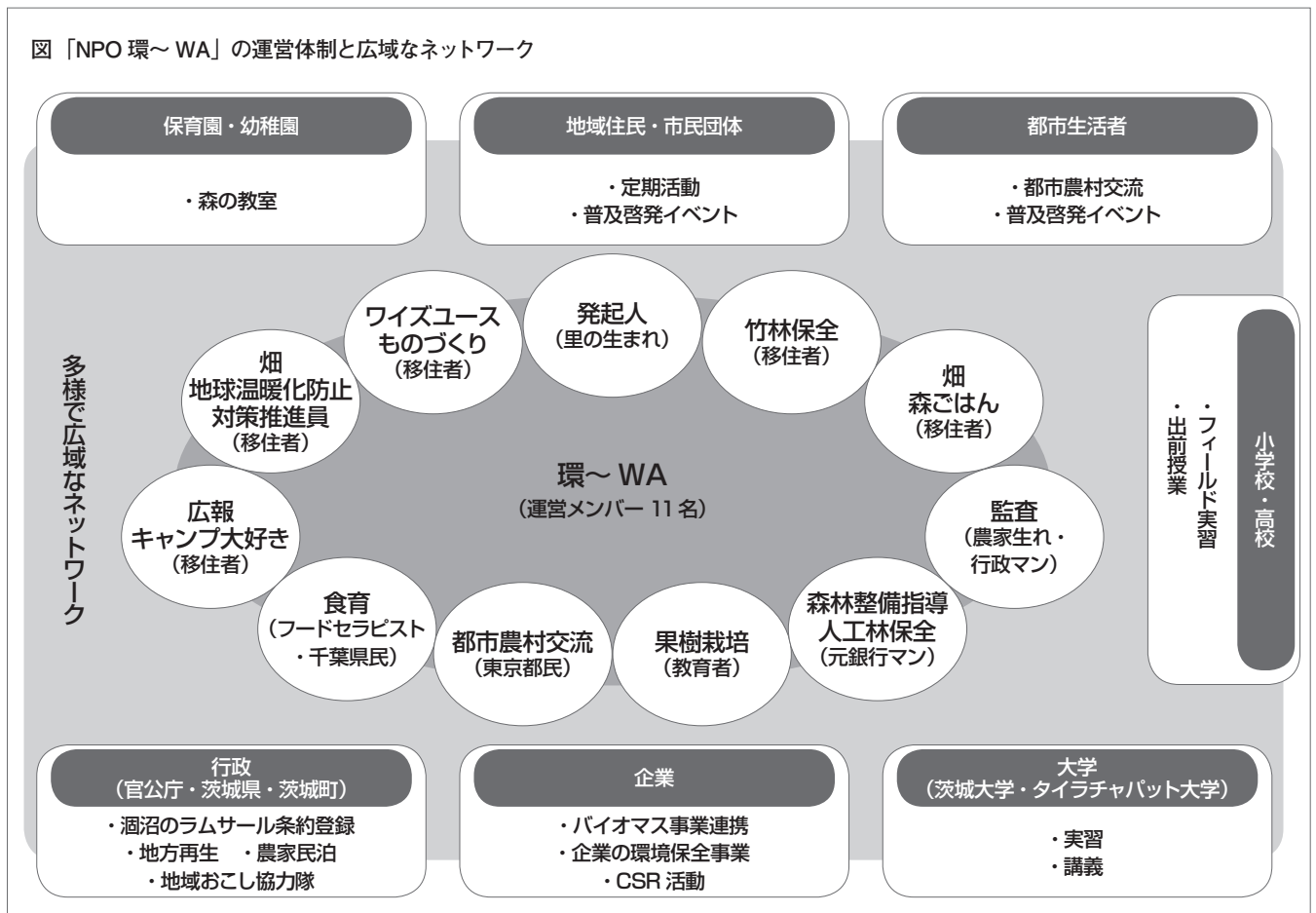
～WA のフィールドで、こういった取り組みをしたいから受け入れてください」ということも数多くあります。企業との連携も多々あり、行政としては県や町、そして町の事業でいろんな取り組みをしている子ども会とか自治会のようなどころとの連携もあります。

● 企業との連携の例

私たちは多様な事業を行っていくために、企業との連携を取っています。例えば、カタログハウス（株）は最近、茨城県でペレット事業を始めたのですが、ここの林業班の方に、森林整備技術指導やペレット加工をお願いしたり、伸栄工業（株）という茨城県の企業には、エネルギー教育やペレットづくり体験などのイベントでの技術協力をお願いしています。

また、茨城県を本拠地としている（株）日立製作所から「里山をどうにかできないか」というご相談をいただき、昨年度に全 6 回の「里山生物多様性保全講座」を茨城 NPO センター・コモンズと連携して実施しました。これは、里山の実情を見て、体験をして、「自分たちにはなにができて、どんなことをやっていくのか」を社員の方々が自ら

図 「NPO 環～WA」の運営体制と広域なネットワーク





企業と連携した森林循環普及啓発 (NPO 環〜WA × 伸栄工業 (株))

考え、実施していくことを私たちが背中を押すような講座でした。

● 産官民での連携の例

産官民での連携も行っています。

茨城町には、素晴らしい土塁のある「小幡城址」という史跡があり、県外にもファンが多いのですが、タケがすごく繁殖していて、荒れてどうにもならない状態になっていました。なかなか町が腰を上げなかったので、私たちが町長に掛け合い、整備を始めています。

また、茨城町には、「地元の地域の元気を取り戻すような取り組みを下さい」ということで、10万～20万円の助成を出す事業があります。私たちの事務所がある飯沼地区という地域は茨城県の特産物でもあるクリの生産地で、何百haものクリ畑が広がっているのですが、近年は担い手が減っていて、荒れたクリ林が年々増えているのが実情です。そこで、三世代交流ということで、楽しく里山でご飯をつくったりペレットをつくったりしながら、ここまでクリの生産をしてきたおじいちゃんが、その子どもや孫の世代にクリの整備の仕方を教えていくといった取り組みもしています。

● 地域エネルギー利用促進にもチャレンジ

新たなチャレンジとして、地域エネルギーの利用促進をしようということで、私が去年、結婚したことを機に、自立型エネルギーシステムを備えた自宅兼事務所をつくりました。

自宅は、太陽光と木質ペレットによる発電、またペレットストーブや太陽光を使った温水器などを備えたもので、「地域の目の前にある自然資源でエネルギーは賄えるんだ

よ」ということを見せるモデル的な場所としました。そして敷地内にある築50年の納屋は、現在セルフリノベーション中で、これから茨城町の地域おこし協力隊として都市部から来た若者と「里山マルシェカフェ (仮)」を進める準備をしているところです。

質疑応答

・Q ペレットづくりをやっていっしょとおっしゃっていましたが、そのペレット成形機は移動式のものでしょうか。また、採算性とはけ口について教えてください。

・A まず、私たちはペレットづくりによる事業をやっているわけではなく、普及啓発事業の一部としてやっていることをご理解いただきたいと思います。

実は、去年結婚した主人が、ペレット事業を全国的に展開している事業主です。彼がいろんなところで講演している話を横で聞いたり、移動型の小型のペレット成形機を持って行って、いろんな世代の人にペレットづくりを体験していただくようなイベントをしているので、私が知っている範囲でお答えします。

まず、移動式の、軽トラックに載せられるようなペレット成形機は、1日で200kgくらいまではつくれます。ただ、エネルギー効率を考えると、普及啓発程度での活用でしょう。あるいは、ハウスメーカーなどが端材やおが屑をつかってペレットをつくり、ペレットストーブを設置したいというお客さまにストーブをご紹介し、端材でつくったペレットを販売するといったことであれば、十分採算が取れると思います。

次に、海上コンテナを使ったような、わりと小型のペレットプラントがあります。これを、福祉関係などと連携して事業を進めていることで、十分に採算が取れている事例が全国に多々あるようです。

過去には、何十億円も掛けた大型のペレット工場が全国に作られました。そのほとんどが、補助金がなくなると頓挫しています。また、大型バイオマス発電のバイオマス原料を地域の森から調達したら、たちまち禿山になってしまいますから、私たちはそうした大型発電は疑問視しています。

やはり目の前にある森の現状を見て、その森の循環に沿った利用の仕方を、生活に合わせて考えていくということが良いのではないかと考えて活動を続けているところです。

森づくり×後継者育成と 継続的な取り組みの ポイント

● 報告者
寺川 裕子
(NPO 法人里山倶楽部 理事)



新しい“里山的”生き方・暮らし方を提案

● 里山倶楽部の活動規模と活動概要

里山倶楽部のフィールドは大阪府南河内郡河南町、大和川の南、奈良県との県境近くの民有林と町有地です。全部で24haですが、そのうち13haは地元の河南町有林で、委託業務で草刈りなどを行っています。あと10haは全部稼働しているわけではなくて、しょっちゅう行ってなにかしているところは、おそらく2～3haもないかな、という規模です。急峻なところなので、苦東・和みの森さんとか環～WAさんの平地林は羨ましい限りです。

団体の経緯としては、前身は1989年に活動を開始したかなりの古株団体で、1995年に里山倶楽部という任意団体になり、2002年に法人になっています。役員が12名（理事11名、監事1名）、会員は約150人といった規模です。

具体的な活動内容については、皆さんは、なにかしらの活動をされているか、しようと思って情報を収集されていると思うので、今日は概要だけで。

● 里山保全事業

雑木林に人工林、竹林も棚田も、大阪の南にはミカン園があるので果樹園もやっています。

● 生産販売事業

前身体体の時から薪炭を売っていて、ほだ木も売っています。無農薬野菜にこだわっているおっちゃんがいるので、無農薬野菜も売っています。お米も売っています。それから燻製用のサクラのチップも売っています。

● 環境教育事業

これは、先に発表された2団体もすぐく力をいれておりましたが、うちも里山キッズクラブとか学校林での活動を頑張ってやっています。

● 人材養成講座

山では安全第一ということで、安全技能講習を「もりあん」という名称でやっています。下手なところに行くと、座学ばかりでチェーンソーにはちょっと触るだけというところもあるのですが、うちは「座学じゃ役に立たん」ということで、チェーンソーは2日、草刈り機は1日、みっちり活動してもらうので、それを求めて来られる方が結構



里山保全事業（左上）、生産販売事業（新、右上）
環境教育事業（左下）、木質バイオマス利用（右下）

多いです。

また、一般的な「里山応援講座」もやっています。これは本当は若者に来てほしかったのですが、なかなか定着しないこともあって、40～50代をターゲットにしています。「スモールファーム」という、無農薬野菜をつくりたい人向けの人材育成もやっています。

●木質バイオマスエネルギー利用

ペレットはプラントが大きくて目指すものと違うと考えたので、薪のコジェネプラントを万博記念公園でやっています。万博記念公園には足湯があって、うちのメンバーが公園内の森を手入れして薪をつくって、熱を供給しています。発電もしているのですが、実証試験ばかりで中々稼働が難しいです。ただ、この万博記念公園は大阪府の指定管理になってしまって、「吉本興業が指定管理を受けたら、里山倶楽部は撤退になるだろう」って言われています。お笑いには自信があるんですけど、「そういう問題じゃない」と言われました（笑）。そんなことで、これは今後どうなるかっていうところです。

●オーダーメイド型活動・研修

里山倶楽部は活動を始めて30年近くになるのですが、「アンタのとこ、いろんなこと出来るやろ。その技術を提供しなさい」ということで、企業からいろいろなお声がかかります。そうした企業のCSR活動を「それやったら、こんなどうですか。こんな場所ならできます。うち100人は無理ですけど、30人がベストな人数です」といったように、ご希望・ご相談に応じてやっています。

また、うちと同じようなNPO、ガールスカウト、森のようちえんとか、そういうところからもオーダーメイド型で提案して受け入れられたら活動するといったこともやっています。

●前のコンセプトが当たり前になってきたので 生き方・暮らし方の提案にチェンジ

設立以来の活動コンセプトは、「好きなことしてそこそこ儲けて、いい里山をつくる」でした。これを東京で話すと、「めっちゃ大阪らしくって良いね!」と言われて、次に会ったら「儲かりまっか?」と言われてたりして、捨てがたいものはあったのですが、そろそろ手垢が付いてきたということもあって、「新しい“里山的”生き方・暮らし方の提案」とチェンジしました。

前コンセプトは、1990年代当時からしてもボランティアが“好きなことして”というのは当たり前で、“いい里山をつくる”のも当たり前なんですけど、“そこそこ儲けて”については、「どんだけ儲けてんねん。ボランティアがお金

の話をするなんて」ていう抵抗感も内部であつたくらいでした。儲けといっても、「経費が出ればいい」というところから、「自分の日当まで」「生活費まで」とレベルはいろいろですが、お金はしっかり回さないとNPOが継続しないということは、いまや組織運営しているどのNPOも感じていることで、私たちだけのコンセプトではなくなってきました。それで、「もうちょっと洗練された言い方にしよう」ということで新しいコンセプトにチェンジしました。

新しいコンセプトは、これまでの発展形として、生き方・暮らし方を提案していこうということで、半農半X（うちは半林ですが…）や田舎暮らし、I・J・Uターン、林業の中では副業型自伐林業といったイメージの生き方・暮らし方を提案しています。

里山倶楽部の中核は40～60代で、これでも里山業界では「若い」と羨ましがられます。

継続的な取り組みのポイント

うちには、いろんなところからヒアリングにたくさん来ていただいています。その時に必ず話すことがあります。今回のお題をいただいて考えた時に、おそらくそれが継続してきたポイントなんだとあらためて思いました。

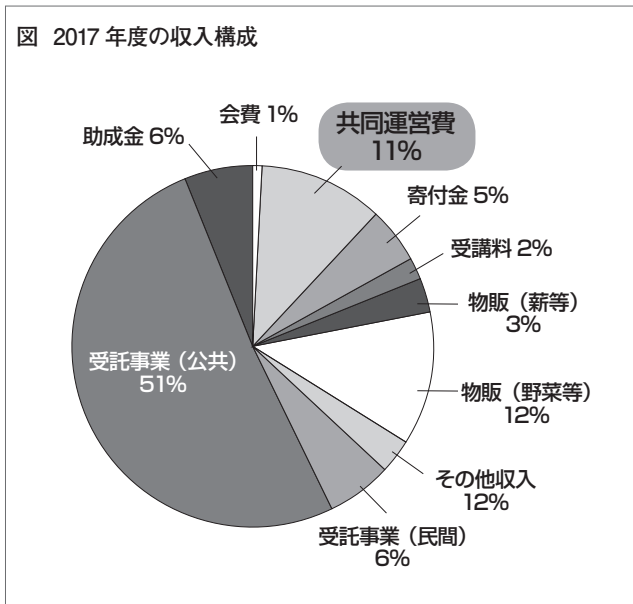
●独立採算制「儲けも赤字も自分もち!」

先ほどお話したように、いろんな活動事業をやっていますが、それぞれが独立採算制を取っている、というのが1つめのポイントです。「儲けも赤字も自分もち」ということです。

それぞれのグループ活動については、その担当者がお金を管理します。私は事務局ですから、お金に関しての相談があったら受けますが、基本的には勝手にやっています。ただし、その収入の5%、ないしは消費税がかかってくる活動は10%の共同運営費を、自動的に事務局に納めてもらっています。ピンハネとか言われますが（笑）、まあ有無を言わず払ってもらうわけですが、それ以外の90%、95%は、それぞれが勝手に使用できるという仕組みです。

また、儲けの部分も各グループが自由に使用できます。10万円の収入を予定していて、それが15万円になったとしたら、儲けの5万円分は事務局に納めなくてもいいのです。ただし、10万円の予定が5万円しか集まらなかったとしても、赤字の5万円は誰も補填しません。「自腹を切つてね」という仕組みです。みんな自腹は切りたくないもので必死です。

図 2017 年度の収入構成



そして、この仕組みのミソは、団体としては赤字にならないことです。団体としての収入は3000万円くらいの規模ですから、その10%の300万円が共同運営費となります。これは大きいですね。

団体収入の半分は公共からの受託事業です。そして1/4くらいが各グループの自主事業で、稼ぎ頭が野菜の物販、薪の物販でも100万円くらいの売上げがあります。その他、受講料や寄付金があって、助成金ももらっています。実は事務局も独立採算制なのですが、事務局は寄付金と会費、そして共同運営費で成り立っています、共同運営費がかなりのパーセンテージを占めているということです。私は給料が月々10万円ですが、それを減らさないためにこういうところでPRをして、いろんなお仕事や参加者を増やしているということです。

この仕組みは個人にも対応しています。私はリースづくりをしていて、これを道の駅で販売して年間8万円の売上げがあるのですが、そのうち8000円は共同運営費として納めています。ほかにも、焼き芋を売っている人とか、コーヒーを売っている人などがいます。

● 新しもの好き 「活動に変化と刺激を！」

2つめのポイントは「活動に変化や刺激を！」ということで、「新しいもの好き」です。

まず、いろんな手法やプログラムを、「なにそれ、面白そうやん」とあまり抵抗なく、積極的にパッと導入してしまいます。また、いろんな活動をしてる人のとこによく出向いて行って、出店してみたりといろいろやっています。実は里山の団体ってわりとシャイな団体が多くて、あまり

若者や子ども達が集う
“森の天空広場”に

NPO 法人 里山倶楽部はクラウドファンディングにチャレンジ中!



安全な水を!

里山保全活動の拠点に、水道を敷く資金へのご支援をおねがいします。

里山倶楽部は1989年に活動を開始して以来、25年にわたり森林保全活動を行ってきました。森の間伐や草刈り作業、森に親しむ講座、子ども達の里山体験活動などを開催し、年間約1500人の方々が里山倶楽部を訪れています。

里山倶楽部の活動拠点は大阪府南河内郡河内町持尾、標高300mの尾根の上にあります。広場や作業小屋などを手作りで整備し、ボランティアの集いや休憩、プログラム実施、また作業道具の保管などに利用しています。

でも、この拠点には基本的なインフラの水道が敷かれておらず、必要な水は、約100m離れた民家から急な坂を登ってポリタンクを何個も運搬したり、雨水をためて手洗いに使ったりしており、長年、活動実施のネックになってきました。

水がなくて・健康、衛生、安全面の不安が・



そこで今回、FAAVO 大阪の「クラウドファンディング」にチャレンジして、水道を敷く資金へのご支援を広く募ることにしました。

目標金額 40万円

～期日 5月30日まで～

●クラウドファンディングの方法で、インターネットを通じて支援金を募っています。

検索 FAAVO 大阪 <http://faavo.jp/osaka>

●支援の金額に応じて、お得でユニークな「お返し」があります。〈裏面必見!〉

※期日までに目標金額を達成しなければ、支援金はいただきません。
※インターネットを使わず、直接の振込みや現金へのご支援もお待ちしています。

振込先：三菱東京UFJ銀行 松原支店 普通 4510466 (トクビ) サトヤマクラブ

問合せ： NPO 法人 里山倶楽部 072-333-0309 / sasayuri@satoyamaklub.org

クラウドファンディングにもチャレンジ

そういうところで出会わないんですよ。知っているところは決まっています「もっと団体がいるはずやのにな」という感じなのですが、そういうところいっぱい出向きます。そして、外部から人と技術とお金を借りることです。

こういう感じでやっていることで、新しい人材、若者層に出会ったり、それが活動の見直しのきっかけになるということが大きいと最近よく思っていて、それが変化として結果にでるわけです。

「チャリティネット森が好き!」は、5年前から行っているのですが、20団体と連携して一緒に寄付金を募集しようというものです。これまでで、大体78万円くらいが集まっています。

一昨年にプロボノにWebページ作成をお願いしました。募集したら9人くらいプロの方が来て、マーケティングからはじめて、デザインからコピーから、とにかくうちのWebページ、大体400万円相当のものが、実費の交通費くらいでできました。これも新しいチャレンジです。

また、クラウドファンディングにも手を出し、目標を低く設定したので、222%達成で100万円弱を集めました。これでうちのフィールドに水道や野外トイレを設置して、快適なフィールドづくりの支援をしています。



新しい世代による展開、30～40才代のトライアル
自然学校の設立を目指す30代男性の「いきよ! ツリーイング」

うちのプログラムに「ワークショップ里山日和♪」というのがあります。これは新規プログラムの受け入れ窓口です。新規で活動を立ち上げるのは難しいのですが、このプログラムの中でやると、里山倶楽部メンバーのサポートが入るのでやりやすいということです。これが上手いっているのかどうか、まだ私たち自身も分からない状態ですが、「これからツリーイングのプログラムをやるねん」という方に「やってみひんか」と声を掛けて、里山倶楽部の主催でその人にやってもらったりしています。また、「アルコールストーブ（携帯用コンロ）をつくりませんか」というワークショップを、里山でカフェを始めた人がやったりしています。

また、里山事業部では大阪府の最低賃金に合わせて謝金を払っていて、普通の会社などに勤めづらくて（よく里山団体には来てますよね。うちのメンバー自体がそんなもんなんですけど…）バイトしている人もいます。

● スクラップ&ビルド 「組織ではなく里山を引き継ぐ」

20年以上活動していると、森林の初期整備は済んで、初心者にも入りやすい山になっています。かつては緑の募金にもお世話になって、資材や道具も揃っています。技術者も成長中ですし、これまで培ってきたネットワークもあります。

では、そうしたものを組織の形で引き継ぐのかというと、私は「それは、もうええ」と思っています。新しい団体をつくってもいいし、会社経営してもらってもいいし、個人でやってもらってもいい、そんな形で「組織ではなく、里山を引き継いでほしい」ということを、最近はずっと思っています。それが、新しい仕事や新しい里山の暮らしの提案なわけです。

かつては、私たちに公共からの支援は一切ありませんでした。むしろ喧嘩をしていました。でもいまは、もう喧嘩の時代ではなくて、すごく支援してくれています。それ

にいまは、どこでもインターネットでつながれるし、いろんな支援があるし、市民協働の仕組みもしっかり整っています。企業も手伝ってくれますし、中間支援団体まであります。そんな至り尽くせりのメニューがあるので、「コレがあったら、私たちが20年かかったことが、5年でできるんちゃうか」と思いますし、そうしたものを活用して、うちのフィールドを新しい形にリニューアルしてくれたらいいなあと思っています。

それを考えた背景というのが、私の経験から編み出した5年サイクル説です。1989年から前身団体が活動していますが、5年ごとに転機がきます。それで、1年目は必死に、2年目は地固めして、3年目はだいたい安定するんですが、4年目はマンネリ感が出てきて、5年目は変化と刺激ということで、なにかしらの変化があります。前身団体から里山倶楽部の名前になったのが5年後の1995年。それから5年後に法人化を考えだして、2年間準備して、2002年に法人化しています。元々別団体だった里山事業部と「一緒にやろうや」ってなったのが2008年、農場部門と一緒に入ってきたのが2012年、クラウドファンディングなどで拠点のフィールドを再整備したのが2017年。「これから5年後はどうなるかなあ」と楽しみです。

こうしたことには、いろいろと軋轢もあり、ソフトランディングではなく、ハードランディングをたくさんしています。それでも結果的には「楽しかったなあ」と思っています。

「なら、変わらないとアカンのか」ということにはなりますが、同じことをやっても楽しくできるのならば、「そんなマンネリもありやなあ」ということをお伝えして、私の経験からのお話を終わりたいと思います。これが皆さんのお役に立てれば幸いです。

企業や地域との連携、会員獲得、 若返りのコツを探る

● コーディネーター

宮本 英樹 (どさんこミュゼ (株) 代表取締役 (元 NPO 法人ねおす専務理事))

● パネリスト

二瓶 奈津香 (自然体験活動指導者ネットワークえんりっと)

大和 文子 (NPO 環～WA 代表理事)

寺川 裕子 (NPO 法人里山倶楽部 理事)

▶ 宮本 今回のセミナーは国土緑化推進機構主催、森づくりフォーラムが共催ですが、この2団体は、私がいつも「人生を変えた団体」といっている団体です。10年くらい前に「グリーンカレッジ」というものの仕切りを、5～6年間やらせていただきました。今日は卒業生も多々いまして、本当に年食ったなって思いましたが、このグリーンカレッジが決定的に私の人生を変えました。皆さんの事例を聞いたり、アドバイスをしたり、コーディネートの仕方を教えているうちに「自分もやんなきゃな」って気持ちになったのです。

なかでも思ったのは、「やっぱり、自分の山を持つ」ということです。いろいろ考えた結果、「日本は土地所有者に権限があるんだな」ということで山を持つことにして、いまは約200haの山を管理しています。それから牧場と、農地が30haと、開発地が20haです。

あるとき、連携先の企業と話していると「うちに、ゴルフ場をつくらうと思ったけど失敗しちゃった不良債権があるんだ。固定資産税が大変で」みたいな話になりました。私はその頃、スクラップ&ビルドで「再生屋」と言われていて、「宮本さん、そこをなんとかしてくれ」と言われたので、「不良債権だったら私が買います」と言ったら役員みんなが大喜びしました。「1円でいいですか？」って言ったら、みんなびっくり返ったんですけど(笑)。結局、その土地をもらいました。

で、もらったはいいいんですが、見てみたら、何の手入れもされていないんです。畑はヤナギ畑で、森は元薪炭林。函館のすぐ近くなんですけど、ナラ材の株立ちしたものと

か、あとは昔植えたトド松やカラマツ松が倒れていたりして。今日は丹羽さんも来てくださっていますが、森の健康診断もしていただき、「なるべくお金をかけずに小資本で、かつボランティアの力を使おう。こんだけ勉強したんだから、やれるだろう」といろいろ考えた結果、私がつどり着いたのが、「動物をつかおう。動物しかない」ということでした。

たまたま北海道には2品種の素晴らしい馬がいます。1つはドサンコといって、森の中でも飼える馬です。「コイツに下草をくわせよう」と。もう1つ、バンバ馬という、木をたくさん引ける馬がいます。この2品種の馬を使おうということです。「こういう動物や文化は、保存したほうがいいですよ」と言っているんな方に手伝っていただき、まず動物頑張らせて感じて動物にやらせて、そのあとに



宮本 英樹さん

人間が入って行くというシステムもつくりました。

そういうことなので、私が表舞台に出るのは、本当に5～6年ぶり、ずっと森にいて開拓していたんです。

そんなことで、そろそろパネルディスカッションの本番に入りたいと思います。

団体の課題は、「新規参加者の獲得」「地域や行政、企業との連携」「後継者の育成、継続的な活動」

▶ 宮本 ちょっとお聞きしたいのですが、団体の長、もしくは団体の運営側にいらっしゃる方ってどれくらいですか。(挙手) 割と少ないかな。日本野鳥の会みたいに数えて、大体47%でした(笑)。では、逆に団体というか、森づくりに関わって3年未満って人はどれくらいいますか。(挙手) では、その他の人は、中堅どころの人が今動員されて来られたんですか(会場笑)。助成金狙い?

この中で、助成金を取っているという人はどれくらいいますか。(挙手) これが結構問題になっていて、助成金に申請する団体が若干減ってきているんです。いま手を上げてくれたのが1/3くらいで、残り2/3は今後挙げてくれるという期待票でいいんですよね。

いまはまさに、森づくりの変換期です。変わろうとしている森づくりの中で、各団体が抱えている課題の1つが新規参加者の獲得で、マンネリ化等で新しい層をなかなか獲得できないという悩みを持っているということです。もう1つの課題が、いろんな地域や行政、企業との連携です。大和さんは、「72団体と連携」という、嫌味な数をおっしゃっていましたが…(笑)。そしてもう1つは、後継者の育成、継続的な活動です。(挙手をしてもらって)みなさんの中では、後継者の育成、継続的な活動にお困りだという方が多いようですね。

「権限委譲」「自己実現」「ステップアップ」がキーワード

▶ 宮本 今日報告された3人のお話を聞いていて、皆さんは三者三様ですが、それぞれが「権限を委譲して、なにか自己実現をさせよう」とされていて、また、それとは逆に、「ステップアップしたら、運営側に回ってもらおう」としているのかなという印象を受けました。そのあたりについて聞かせていただきたいと思います。

▶ 寺川 うちが独立採算と言っているので、いきなり権限委譲ですね。それと、確かにステップアップの仕組み

にも関わってくるんだらうなと思います。もちろん、いきなりはできないので、独立採算制でなにかやるときには私も入りますし、これまでやってきた人たちがサポートします。特に参加者がステップアップしやすい受け入れ窓口としての仕組みを持たせているのが里山日和という事業です。これは、すでにある事業の枠組みの中でやってもらうわけですが、その中でも運営側に回ろうと考えている方に権限委譲してしまいます。そうすると、だいたい大概のことはできてしまい、自信が付き、何回かそれをやっていくうちに、運営会員になってもらう。

余計な話ですが、昔、運営会員になるのに「いっぱい働くのに、なんでいっぱいお金払わなあかんねん」という苦情があって、うちは運営会員も一般会員も会費は一緒です。逆に言えば、運営会員のハードルがすごく低いんです。運営会員は一票持っているということですが、一般会員として権限委譲されて(権限委譲なんて言いませんけど…)自分たちでやってきた人に、「運営会員になってよ。別に変わらへんよ、会費も変われへんし」って言ったら、「ほな、なりますわ」と、なんとなく運営側になってしまう。うちは、そんなところがあるのかなと思います。

▶ 宮本 それって、なにかヒントを得てのことですか。それとも会社にいた時にそうだったのですか。

▶ 寺川 いや、やっているうちにですね。

▶ 宮本 大阪っぽいですね。フランチャイズですよ。しかも本部はお金を出さないということですが、それで不満は出ないですか。

▶ 寺川 権限委譲は強制じゃないので、別にそれをやりたくなければ、すでにある仕組みの中でスタッフとしてやって、上手くいけばスタッフ料なり交通費がもらえます。やりたそうな人に声をかけますが、「あなた、それをやりなさい」と言うことは、うちはほとんどゼロです。そのかわり、言わないので人が逃げているかもしれませんが…。

▶ 大和 権限委譲と運営側に回ってもらうことについては、「そういう仕組みをつくりたい」と目標としているところです。里山倶楽部さんは30年の歴史がおありで、きっと試行錯誤もしながらつくってこられたかと思います。

実は、NPO環～WAを設立した時、「里山でチャレンジする機会をつくること」を主目的にしました。誰かに指示されてやることから学ぶこともゼロではないけれど、自分の「こんなことが出来るんじゃないか」という思いを実現しようとするプロセスの中に、なにか人づくりのキモがあるのではないかと考えています。

と言いながら、5年間里山の整備をしてきました。森だけでなく、農地を広げたり、クリ畑の保全を始めたりとい

ったことを行ってきたので、この6haくらいあるフィールドの中で、なにかやりたい人、使いたい人を募りたいですし、私も学びたいというところですよ。

試行錯誤してやっていくうちに、客観的に見れば団体としてステップアップしてきたんだろうと思いますし、実際に出来ることも増えてきました。行政や企業、地方自治体などにも提案できるようになっていて、このステップアップが一番大きかったのではないかと思います。

▶ **二瓶** 苦東・和みの森は、「コミュニティセンターみたいな、人が集まる森をつくろう」というところでスタートしてまだ10周年くらいです。いま協議会の人たちに聞くと、私のように周りから運営をサポートする人が生まれてくることは、全く想像していなかったらしいです。

私自身も、まさか自分たちで団体をつくることになることは、まったく考えていませんでした。休日のレジャー先として行っていた森で、上手く人と出会って「面白いことをしようよ」というワクワクから、ポンポンとここまで来ちゃいました。

ですから、苦東・和みの森は、まだステップアップのところに差し掛かったばかりなのかなと思っています。

▶ **宮本** 二瓶さんは参加者だったのが運営側になったわけですが、そこにはなにか仕掛けがあるのですか。誰かそそのかした人がいるとか。

▶ **二瓶** そそのかされたとは思っています（笑）。

当時の私は、「小さい子どもがいて、働けないんだけど働きたいんだよね」というアピールはしていました。ただ、「子どもを預けて働くのはどうなんだろう」という疑念もあったので、「子どもを連れて出来る仕事があったらいいな」と思って、実家の敷地を借りて産直の野菜屋をやったりしていたんです。そういうふうになんか自分でやっている」ところに、当時の事務局の方が注目をしてくれて、「だったら森で、事務局の運営をやってみない？」というお誘いはいただきました。

そうして事務局をやっている間に、「NPOって、こういうふう運営していくんだな」と感じたり、事務局として毎月の活動に参加していろんな人と接する中で、自分の他にも「子連れで働く環境がほしいな」と思っている人がいたという、そういう出会いもきっかけになっています。

▶ **宮本** 自己実現できる場として森のニーズが、特に女性のニーズが高いというところでしょうか。

▶ **寺川** 私は子どもがいないのでそこはわからないのですが、ニーズはあると思います。ただうちは、そのニーズを受けきれないのかな。そのニーズを受けるには、やはりフィールドが安全かどうか、サポートできる体制があるか

どうかすごく重要でしょう。

自己実現に関してはやはり、「この人の自己実現はなんなのか」というところで、そこはお母さんに限らず、男性でも若者でもみんな同じです。その自己実現に対して、こちらがなにを差し出せるのかというところには、いろんな仕組みがあるのがうちの強みです。例えば同じ草刈りをやるにしても、ある人は、学びのために自分でお金を出して草刈りをする。ある人は、無償のボランティアで、全くお金を介在させずに楽しんでやる。ある人は、交通費だけもらって草刈りをする。ある人は、日当までもらって草刈りをする。うちでは、極端に言えば、同じ場所でそれが選べます。そこでは、お母さん方はたぶん「草刈りせんでええやん。子どもと遊ぶ人たちが横におったらええやん」ってなるんですが、それも並行可能です。そういう体制を、結果的にはつくれているのかなと思います。

▶ **大和** 私も子どもがいないのですが、多分、子どもたちだけでなく、どの年代の人も「どういうふう生きるのか」と考えているんじゃないのかと、自分が子どもの頃から思っていました。宮本さんがおっしゃるとおり、私は、森の中に自己実現をする場を見つけた人が、そこを有効に使うという循環を生み出していけたらいいと思ってるのだと思います。

実際に運営側にいますと、ただ「この日に参加します」という一般参加者とは違う責任を負ったり、心持ちで活動を運営していかないといけないのですが、この運営メンバーも様々です。いつまでも「言われたことだったらやりますよ」というメンバーもいますし、私よりもずっとずっと先に行っていて、例えば森づくりの計画を立てて、それも「長期スパンで考えていきましょう。ただ私の力量もありますから、今年度はこんなことをしていきませんか」と提案してくれる人もいます。そして、ライフステージもあります。私たちの運営メンバーは30代から60代なんですが、転勤もあれば、例えば「専任で農家になっちゃいます」という人も、体調を崩して「しばらくフィールドに行けません」という人もいます。その時々で変化するけれど、それでも「出来ることをやっていきましょう」ということです。「掲げたから全部やらなければいけないんだ」と思うと、きっと自己実現だったり目的がどうのではない、非常に重いプレッシャーに潰されてしまいます。ですから、それぞれのメンバー、それぞれの参加者にとっては自分と向き合ってやりたい事をやっていく場であり、団体としては、有機的に変化していく中で出来ることを、少し高い目標を掲げてやっていくということを心がけているのかなと思います。

▶ **二瓶** いまお話を聞きながら、苦東・和みの森で、なぜ私は自己実現につながっていたのかを思い出しました。

苦東・和みの森の「月に一度は森づくり！」の活動には4つの「ど」というのがありまして、「どれをやってもいい」「どれもやってもいい」「どれもやらなくてもいい」「どこか行くときは一声かけて」という4つの「ど」だけを守っていれば、あとは参加者が自分の好きなように過ごしていいという活動です。それだけ自由度の高い空間の中で、活動メニューがひたすら薪割りの日もあるし、木道づくりをしたり、森のようちえんがあったり、ものづくりをしたりと、その時によっていろいろですが、好きなメニューに参加して自分が手も口も出さないと、その活動は発展しないんです。主催する側は、メニューを用意して「場所と道具と、最初はこんなふうにやろうと思っているけど、どう？」って、参加者にふってしまいます。なので私たちは「こうしたらどう」「ああしたらどう」と、みんなで揉みながら、その中から得意な人が出てきたり、協力し合ったりしながら、その場でその日一番いいと思う方法で活動を進めていくのです。

初めて森にやって来る人が多い苦東・和みの森で、この4つの「ど」と、参加者が口も手も出す方法というのが、参加者にとっては自分が好きなスタンスで、好きな分量で関わる事ができたので、それが居心地がいいということもあります。そうした仕組みだからこそ、参加者個々の主体性が自然に作動したのかなと思います。

▶ **宮本** ありがとうございます。なんとなく皆さんもお分かりのように、この3人は参加者の目線にかなり近くて、自分もやりたいことをやっているだろうし、参加者なのか運営者なのか、その垣根が非常に低いんですね。かつ、同じように自己実現できる場をどうやったらサポート出来るのかを考えておられます。



左から、二瓶さん、大和さん、寺川さん

まず主体性、アクティブラーニングであることが第一で、主体性がある人に対して、どういう課題を投げたらいいのかが上手くいって、そこでステップアップとか権限委譲の仕組みをたくさん持っていることが、時代が変わっても長持ちするコツなのかなと思います。

▶ **宮本** 皆さん、隣の方と仲良くなりましたか？ 名刺交換をしていますか？ 近くの人と、皆さんの団体や会社で自己実現できる場をつくる仕組みとか、その人が成長するためにやっていることなどがあったら、ちょっと話し合ってください。「こんなことも出来るよ」「こんなこともやってあげたら、参加者ももっと成長するよ」みたいないい意見があったら、私たちにも聞かせてほしいと思いますので3分間ほど話してください。

(ガヤガヤタイム)

▶ **宮本** どなたか「コレは妙案だ。コレは面白い意見だから発表したい」という方がおられたら、ぜひお願いします。

▶ **参加者** 福井県から来ました。私は40年間森林組合に勤めていたんですが、自分が植えた数多くのスギの木が使えなくなるという状況になったことがありました。ちょうど東日本大震災があった日に国土緑化推進機構の間伐材コーディネーターの研修を受けていて、地震直前にオイスカというNGOが間伐材で積み木をつくっているという話を聞いていたので、地震の1年後にオイスカにその話を持っていったら、「東京おもちゃ美術館という、子ども相手の木育活動をしている団体があるので、そこに行った方がいい」と紹介され、いまはそのスギやヒノキ、広葉樹でいろんな玩具をつくり、幼稚園とかを回っています。

それとは別に、市内の小学校と話をして、3年生の時に森づくりの教室を開いて地域のドングリを拾いにいき、6年生までそれを学校で育て、卒業する前に植えるという活動をしています。それがだいぶ大きくなってきてので、今度はそれを間伐して利用する方法を、子どもたちと考えている最中です。

▶ **宮本** ありがとうございます。年々木は大きくなりますから、それぞれのテーマを与えておくと、意外と引張れます。また、自分が植えたものは大人になってもどこかで気になっていると思いますので、植樹の時に大人になったら戻ってくるような仕掛けをつくって、その流れで引張るというやり方もあると思います。

ほかに何かありますか……。 (沈黙) えっ、あんなに喋っていたのに？ (笑) では、3人からどうぞ。

▶ **寺川** こちらでは、質問できなかったことをしあいつこしていたんですけど、私からのもっばらの疑問は、お金の話でした。自己実現にはお金が必要で、「やりたいけれど、

生活のためにできない」っていう人がすごく多いように思います。いまの若い人は生活が大変ですし、リタイアされた方も、バブルのころ溜め込んだ方はOKですが、これからは年金もらっても働かなければダメな人も多くて、私自身もそうなりつつあります。

それで、2人に「どう？」って聞いてみたら、基本はボランティアなんですけど、ここでの講師料とか、それ意外のお金とか、団体の会計以外でもいろいろ動いているわけです。別にそれを隠してるわけじゃなくて、動いているものがたくさんあるのは私も一緒なので「そういうところもやっぱり大事よね」と、美しくまとめてみました。

▶ 宮本 兼業のススメ、というのかな。今の流行りですね。

直球の“森づくり”ではなく、結果として森づくりを行う変換装置づくり

▶ 宮本 今日の3人の話を聞くと、「森づくり」を直球で出してしまうと、なかなか参加者が集まりづらくなって、ちょっとした変換装置をつくっている。それが、結果的に森づくりになっていました」という話なんです。これはイコール「参加者側の課題を解決しますよ」とそちらに寄っておいて、結果的に森づくりという大きな課題を解決しようというやり方だと思います。

ここでは、それぞれの変換装置を教えていただければと思います。

▶ 二瓶 苦東・和みの森に来る方の半分以上は、おそらく森づくりという意識があまりないと思います。一応チラシには「森づくり」と謳ってはいるのですが、口コミで広がっているのは、「あそこに行くと、子どもは森の中で木に登ったりワーワーしたりして楽しそうだし、大人たちが付いて、子どもが刃物を使って木を切るとか、そういうことも教えてもらえるよ」といった感じです。大人も、「お母さん、そんな森に入りたくないわ」とか言いつつ、ほかの参加者と焚き火を囲んでアウトドアクッキングを楽しんだりしているうちに、「ああ、薪が足りないから割らなくちゃ」となって、割ってみると「案外楽しいね」という感じで、「いま楽しい」という要素が一杯です。そうなっても、森づくりをしているという意識にはあまりなってないんじゃないかと思います。

▶ 大和 うちの活動に参加しているのは、「THE 森林整備がしたい」という方、「社会貢献とか、環境にいいことがしたい。そんな技術はないけれど、自分でも出来ることがあるなら」という方、そして「あそこの活動に行くと美味しくて楽しいんだよね」という方の3タイプです。なの

で、毎月の定期活動は、この3タイプを必ず用意しています。例えば「森林整備チーム」「竹林チーム」「森ごはんチーム」みたいな形です。

やはり間伐とか、立木を倒すのは危険が伴うわけです。機械もチェーンソーも使いますので、「森林整備チーム」には熟練というか、やりたい人が入ります。一方で竹は、小さなお子さんでも手ノコで切れますし、それを親子でやるのもすごく楽しいので、「竹林チーム」は親子でも来てもらえるし、「竹林をどうにかしたい」という方にはガツガツ整備してもらいます。そして「森ごはんチーム」というのは最初からやっていたのですが、自然界と人間をつないでいるのは、絶対に食なんです。なので、薪などの森の燃料でごはんをつくるのです。それぞれのチームに「これをやりたい」という人を入れて、それぞれで「この人がもう慣れてるから、ある程度任せちゃおう」という感じに、ボランティアの方々も育っていくことを願いながらやっています。

▶ 寺川 うちもプログラムをつくるときに、意識的に必ず森づくりに役立つなにかをプログラムに入れています。いかに、それと感ぜさせずにフィールドに役立つことをしてもらい、気がついたら「いつのまにか、森林づくりの手伝いをやっていた」というふうにできるかを、みんな苦心して考えています。

同時に、うちはフィールドがあっちこっちにあるので、「ミカンのジャムをつくるから、ミカンとってもらおうや」とか、「今回はタケノコでいく。食べることで誘って竹を切ろうや」とかを季節ごと、フィールドごとに考えています。

もう1つ、例えばうちは野菜を売ってますが、野菜を買う人にとっては、森づくりはほとんど関係ありません。でも、共同運営費10%の仕組みがあるので、そこで森づくりを手伝ってもらっているんです。コーヒーを飲んでくれた人にも、「その売上げの10%が森づくりにつながっているんだよ」と後からメッセージを伝える。そういう意味では、なにをやっても森づくりという目線からのメッセージなのかなと思いました。

▶ 宮本 やりたいことと、やらなければいけないことを上手く一致させていく能力というのは、だれかの才能ですか。

▶ 寺川 20年やってきた中での文化ですかね。毎月1回会議があるんですが、その時に「今度こんなやるんやけど」という相談があって、大概誰かが「それやっても全然うちのフィールド関係ないやん」とかツッコミを入れて、そうすると誰かが「いや、これこれこうやったら、あそこの森が助かるやん」とか「あそこの田んぼの草取りしてもらったらええんちゃう？」とか。そういう掛け合い

でプログラムができていくのはよくあるシーンですね。

▶ **宮本** 特に里山倶楽部は、暮らしみたいなどの提案ですから、余計にそういうことが必要な感じもありますが、そのへんはどうですか。

▶ **寺川** 暮らしという意味では、里山暮らしをしたい人が、うちを通過していきます。そういう人は2～5年、うちでいろんな技術を身につけていくので、こちらとしては「そろそろ、ちょっとくらい運営に関わってくれるかな？」というところで、「ああ！行ってしまった」となるのですが(笑)、まあ日本全国で考えれば、それはそれでかまへんかなと。

▶ **宮本** 常に更新されていくという意味では、卒業できる仕組みを持っているのは大きいですよ。あと苦東・和みの森のバリアフリー木道、完成したんですね。私も、木道の1枚目を敷きましたよ。

▶ **二瓶** 10年かかりました。私も、1枚目2枚目のところにいたんですけど、10年経ってしまったので、スタート地点は朽ちてきたかなと……(笑)。

▶ **宮本** ただ板を敷いているだけなんです。最初はお金をかけて木道をつくらうとしたんですが、車椅子の人たちが「つくられた木道なんて面白くない。自分たちも凸凹したところを歩いたりとか、健常者と同じようなことがしたいし、自分たちもつくりたい」と言ってきて、「じゃあ、どうやってつくらうか」ということでしたが、あれは達成感が凄いいんじゃないですか。

▶ **二瓶** 10年ずっと通ってきた人は3～4組くらいしかいませんが、やはりスタートを見ていたので、ものすごく達成感がありました。私はさらに、「えんりっと」の活動を始めたので、「木道をバリアフリーでつくったからには、木道を使う子にきてほしい」と思って、去年、車椅子の子どもたちに声をかけて来てもらいました。そういう子ど

もたちは森に来ることがほとんどなくて、「生まれて初めての森です」という子がいたりするのですが、その子たちは、いつも舗装された平らなところしか通っていないのに、木道のガタガタで大笑いするんですよ。そういう姿を見て、「この木道をつくってきてよかったな」と思いました。

▶ **宮本** いま、働き方改革が言われていますが、やりがいのある仕事とか「自分がやっている仕事が、なにかの役に立っている」という実感がない若者が多いのじゃないかな。いまの木道のように、目に見えて何かがつくられていたり、というところに癒やしを感じる人が多いんですよ。また、単純作業も癒やしになっています。普段は頭ばかりで考えていて全然形になっていないような時に、そのことがストレスになるといった話もあるので、変換装置としては「癒やしの空間」ということもあるのでしょうか。

あとは胃袋を掴むことで、これは皆さんもやっていることだと思いますが、これも大事です。

▶ **宮本** 「こういうことをやった結果、森づくりにつながったよ」という具体的なアイデアを持って帰りたいので、ここで、また3分間、アイデアを交換していただきたいと思います。もちろん、いま閃いたものでもいいですよ。「これやっとならば、実は森づくりじゃね」というアイデアがあればよろしくお願いします。

(ガヤガヤタイム)

▶ **宮本** 誰か今度はなにか具体的なアイデアを発表してください。

▶ **参加者** 千葉市の中央区で、子育て支援の施設を立ち上げました。木育推進事業ということで、私も東京おもちゃ美術館のおもちゃコンサルタントマスターで、木の玩具を入り口にして、そこから「木育おもちゃフェスタ」をさせていただきながら、木の玩具の「この木はどこから来るの?」とか「どんなふうにつくるの?」という疑問が参加者の中から挙がったことで、森づくりまでいってみようかなとなったのが去年の初めてで、まだ森づくりは1年だけです。

いま、たまたま隣に座っていた県の森林課の方から、「安全・安心というところを担保しないと、子育て世代が森に入ってくることは難しいんじゃないか」という提案を受けました。とにかく、ママ・パパたちは「子どもが安全じゃない」というところから始まります。楽しいプログラムは用意するけれど、その裏で安全・安心をしっかりと担保する環境を整えることが大切だと思います。

あと、この活動は「地域で孤立している親御さんたちをなんとかしてあげたい」というのが出発点だったのですが、その課題解決ではなくて、子育てに新しい価値観を



参加者同士によるアイデア交換

ポイントと投げあげるといって、いままで森に来たこともないような方に森に入るチャンスをつくってあげられたというところが、少しずつですが結果的に私も森づくりに貢献しているということかなと。

本当にいまは「森に行ってみよう！」っていう親子が増えているのは実感として感じているところです。

自らの弱みを自覚して発信すること、相手の弱みを握ることが連携を行うコツ

▶ **宮本** 最後に、地域、行政、企業との連携をどうするかという課題です。お三方が言っていた共通言語が、「連携は弱みの補完。自分たちができないこととか、やれないこと、弱みにこの連携ツールを使うんだ」ということでした。女性ならではの、という面もあるのかも知れませんが、助けてもらえるコツ、あるいは連携できるコツをお話しいただきたいと思います。

▶ **大和** これは多分、人間関係でもそうだと思うんですが、自分の得意なところを思いっきりやり、その分弱いところを、それを得意とする人にやってもらうことによって、弱いところに無駄なエネルギーを注がずに、得意なところに強いエネルギーを出していけるし、1 + 1 = 2ではなく、もっと大きいのが生み出されます。それがいろんな波及効果も生み出していくんだと思います。

取り組みの連携も本当にそうで、例えば資金もない、技術もない、あるのは荒れたフィールドだけといったNPOは、まずは同じような目標や理念を掲げている企業や団体を嗅ぎ分けていくわけです。それで、弱いところを持っている企業や団体に声をかけて、連携したら、そこが「こんなすごいことをやっているんだよ。こんな素晴らしい企業なんだよ」と、いろんな場で発信していくことが、私たちNPOのお返しなんじゃないかなと思います、そうしたつなぎ役になっていくことを心がけてやっています。

もう1つ、相手からいただいたお話は、基本的には無償ではしないことにしています。学校でやっている授業も、こちらから学校に提案していったのですが、「先生たちは、準備をする時間も含めてお給料が出てますよね。あなた方ができないことを、私たちが出来る技術やノウハウを使って提供するのですから、ボランティアや、タダで使える業者だとは思わないでくださいね」と伝えています。企業は割と、そういうところを分かってくれますが、行政とか学校は、茨城県にはそういう考え方の基盤ができていなかったんで、そういうところから意識をつくってきていました。私たちの連携が上手くいっている理由

は、お金を請求しているというところもあるのではないかと思います。

▶ **寺川** そのとおりだと思います。「私たちはこれが得意です。ちゃんとお金取ってやれるだけの自信があります」というのが見積もりなわけで、単純に見積もりが書けるかどうかは、非常にドライというか相手にとって分かりやすいです。もちろん無い袖は触れないので、「そんな無理や」ってなればそこから話が始まるわけです。

弱みという話で言えば、これは女性だからかというわけかどうかわかりませんが、「うちはお金が弱みです。お金ないです」と、あっちこちで言っています。ふだん見ていると、自分たちの中には弱みもあるけれど、その弱みを出さず、持ち種だけで完結しているところが多いような印象を受けます。「弱いところはやらなくていいから、これだけでやろう」というのは、それはそれで調和的でもいいけれど、結局悩みも解決できないというところもあります。「うちは、これが足らんねん、できないねん!」と大きな声で言うことも大事な、と。

うちは通信を毎月出しているんですが、印刷費をまともに出すと、12万円くらい掛かるんですね。予算チェックすると、ギリギリいっても10万円しかないんで、毎月2万円ほど、協賛して下さるところを募集してますということ、半分冗談、半分本気で発言しておきます。

そういうふうに、自分の弱みを自覚することが大事で、外から見ていると、それを自覚していないところもあるんじゃないかなと思います。それを自覚した上で発言して、後はどこに助けをくれる人がいるかは、そっちの才能で探さなきゃいけないわけです。

もう1つ言うと、相手の弱みも握れば、win-winの関係が出来ます。学校とか企業と一緒にやる、そこに見積もりを立てるといってのはそういうことです。弱みって言うとマイナスなイメージですけど、裏を返せば、それでwin-winの関係をつくるということなのかなと思います。

▶ **宮本** 自覚のない甘えはダメで、甘えているんだ、と分かっていたらいいんだということでしょうか。深いですね。

▶ **二瓶** 苦東・和みの森も「えんりっと」も、行政や企業との連携はまだまだ弱いなと思っていて、いまの話を聞いて「なるほど」って感じです。嗅ぎ分ける力というのを訓練しようかなと思いました。

それと私は、「うちにはこれがない。助けて下さい」ということがあまり言えなくて。去年1年は営業を頑張って、市役所で各課をまわって、「こんなことやっています。こういうことしたいんです」とアピールはしたんですけど、いまのところどこにも届いてない感じなので、もうちょっと

勉強したいなと思います。

3人のパネリストの気づきと課題

▶ **宮本** では時間なので、今日気づいた自分のところの課題と、「こういうことをやっていこう」という気づきをシェアして終わりたいと思います。みなさんもノートかなにかにまとめていただきたいと思います。3人には、書けた順番に発表をお願いします。

▶ **二瓶** 【自分たちに足りていないモノ、そこを助けてくれるような相手とつながる】

本当に最後のところですが、私たちは自分に足りていないところを助けてくれる相手を、もっと探さなくちゃいけないなというのが、今日の私の気づきです。できれば、こっちの弱みと、相手側の弱みを掛け合わせると上手くいくようなところをよりサーチするというか、そういったことをしたいなと思いました。

▶ **大和** 【・エンパワーメント（権限譲渡） ・森のようちえん】

課題は、エンパワーメント（権限譲渡）ですね。里山

倶楽部さんが実現しているような独立採算制の事業にしていくというところを、しっかりと目指していきたいと思います。それと、森のようちえん、またプレーパークのようなものをつくって、子育て世代の方々が「この場所を使わせてもらえませんか」と言ってきやすいような活動にしたり、場をつくったりといったことを進めていきたいと思ひますし、もっと自由に、「もっとこんな遊びができるようにしたい」という方々が参加できるような内容で発信できるようにしていきたいと思ひました。

▶ **寺川** 【“お金”と言ひすぎず、“楽しさ”“やりがい”をあらためて追求する】

実は今日、二瓶さんに子どもたちの楽しい写真をたくさん見せてもらって、「そうやんね、原点は！」って凄く感動したんです。大和さんは、最初はすごい目標を語られたでしょう？ そういうところって、うっかりポンと飛ばしちゃうんですが、それってやっぱり皆さんのやりがいの話なので、これは反省やなと。「お金！」って言うとうけるんで言っちゃうんですが、「あ、これは言ひすぎると、お金の話ばかりしてると思われるかな」と。お金だけでなく、楽しいことややりがいも追求していますので、そこもしっかりと忘れずに言わなければいけないし、追求することを忘れてはいけないなという反省点でした。

▶ **宮本** いやいや、今日は、掴み、広げて、落ちるっていう役割がはつきりあったので、その役としては最高でしたよ。以上を持ちまして、大喜利を終わらせていただきます（笑）。どうもありがとうございました。



最後に参加者全員が自らの課題と気づきをまとめ、パネリストは発表

1 日目 閉会挨拶

日高 瑞記 (公益社団法人 国土緑化推進機構 募金企画部長)



皆さん、本日は大変お疲れ様でした。

まず、ダイドードリンコの源様、ローソンの仙田様、大変お忙しい中、企業サイドの取り組みをご紹介いただき、ありがとうございました。それから、NPO の取り組みを二瓶様、大和様、寺川様にご紹介いただき、パネルディスカッションでは宮本様に全体の取りまとめをしていただきました。本当にありがとうございました。

今日は募金の業務部、基金の業務部から、お金を使うサイドの皆様にご報告のお話をさせていただきましたが、私どもの企画部は、企業の皆様や一般の国民の皆様から、いかにして募金を集めるかという仕事をしています。

そういう中、企業からの募金は相変わらずご協力いただいているわけですが、最近は各社内の社員の発案で、「そういえば緑の募金があるじゃないか」ということで、企業に募金をしていただくケースが多くなってきたように思います。例えば、外資系で本社がサウジアラビア国営の石油会社であるアラムコ・アジア・ジャパン株式会社では、「なにか自分たちに環境活動で出来ることはないか」と社員に意見を募ったところ、「森づくりがいい。それなら緑の募金ということもあるんじゃないか」という話が出て、本社の方からも OK がでたそうです。まだ振り込まれてはいませんが、10万ドルの募金をいただくという、内々の話をいただいているところです。

やはり、「緑の募金」によって森林づくりや緑づくりが

進んでいることがいろんな人の目に触れることが、「それなら手伝ってやろうじゃないか」という新たな募金につながります。それを皆様に還元することで、さらに森林づくりや緑づくりを推進していく、という流れができていきます。ですから、ぜひ皆様からも発信していくような形で、森林づくりや緑づくりを進めていただければ、非常にありがたいと思います。

昨日から3月末まで「緑の募金」「緑と水の森林ファンド」の公募を開始していますので、どんどん応募していただいて、ぜひ国民の皆様方にいただいた募金を有効に活用していただければと思っております。また、皆様と一緒に、我が国の緑、森林の育成に努めてまいりたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願ひいたします。

以上を持ちまして、緑のボランティア活動助成セミナー2018の1日目の予定をこれで終了させていただきたいと思っております。ありがとうございました。お疲れ様でした。

緑のボランティア活動ポスターセッション および 緑のボランティア活動助成プログラム 個別相談会

■ 緑のボランティア活動 ポスターセッション

● ポスターセッション掲載団体（掲載順不同）

- ・NPO 法人月尾暮らし工房（福井県）
- ・公益財団法人トトロのふるさと募金（埼玉県）
- ・奈良・人と自然の会（奈良県）
- ・ゆりりん愛護会（宮城県）
- ・キッズ森づくり体験フォーラムひろしま（広島県）
- ・森の健康診断出前隊（愛知県）



■ 緑のボランティア活動助成プログラム 個別相談会

■ 交流会



「森林ボランティアの進化と変化」 森林づくり活動実態調査 分析結果と今後

● 報告者
富井 久義
(筑波大学大学院)



「実態調査」のこれまで

私は、この森づくり活動の実態調査を行うにあたっての検討委員を務め、皆様にお答えいただいたアンケート調査票の内容を検討したり、集計・分析等を行いました。その中でいろいろと課題が見えてきたのですが、それがどのような形で表れてきたのかをご紹介します。また、この調査は3年に一度行われていて、次回の調査は来年行われる予定です。それを実施することになればという話ですが、今後の森林づくりに対する実態調査は、このようにして行っていけばよいのではないかと案についても、ポイントを絞ってお話したいと思います。

森づくり活動に対する「実態調査」は、1997年度から行われています。調査主体はずっと林野庁が行っており、特徴は、森林づくり活動団体で都道府県が把握している全体に対して行うというところにあります。2012年度のみ抽出調査でしたが、それ以外は全ての団体に調査票を送って回答を求めています。

2015年度は、森づくりフォーラムがこの調査の実施主体になり、「これまでのような単純集計だけではなく、クロス集計をしてみよう」「調査から見えてきた結果についてフォローアップの調査をしよう」ということで、この2年間活動してきました。

この調査結果は、現在インターネットで公表されていて、2012年度までの結果は林野庁のホームページに、2015年度の調査結果については、森づくりフォーラムのホームページに掲載されています。詳しい結果をご覧になりたい方は、そちらをご覧ください。

「実態調査」の成果

実態調査の成果で一番参照されているのは、森づくり活動をしている団体はどれくらいあるのか、ということです。活動団体数や活動規模の推移を明らかにしてきたこと、また、活動に対する課題と必要な支援はなにかを明らかにしてきたことが、「実態調査」の成果と言えます。

● 対象団体数の推移は微減傾向

実態調査の対象団体数は、1997年は277だったのですが、2012年の調査では、3060あることがわかりました。2000年代が森づくり活動団体の拡大期であったことが分かったのが、実態調査の一番の成果だと思います。

今回実施した調査では、活動団体数が3005と少し減っています。2018年に調査をしてみないと、本当に減りつつあるのかが確定できませんが、どうも2000年代の拡大期とは異なり、変化の時期にきていることが分かってきました。

● 活動目的「里山保全」と作業実績「下刈り」の浸透

1997年から調査を行って分かったことの1つに、活動目的として「里山保全をしよう」という団体や、作業実績として「下刈りをしよう」とする団体が増えてきたということが言えます。また、多様化といったことも言われていますが、「里山保全」は全団体の80%が（2003年は59%）、「下刈り」は71%が（2003年は55%）が行っていることもわかりました。

● 「参加者確保」「資金確保」「連携の停滞」が共通課題

共通の課題として挙げられるのは、「参加者確保」「資

金確保」で、1997年の調査当初から50%の団体が示しています。この比率は少しずつ増えており、現在ではどちらも70%程度の団体がこれらの課題を持っていることが分かりました。

また、今回のセミナーの課題の1つは外部の行政や企業との連携ですが、ネットワークに参加する団体（2012年66%→2015年51%）や、他団体に対する支援や協力をしているという団体（2012年49%→2015年36%）がだんだん減ってきている停滞傾向にあることも分かりました。

● 森づくり活動の中心は50～70歳代

「高齢化傾向」も大きな課題ですが、私が試みに大都市、地方都市、農山村と分けて分析してみたところ、森づくり活動を実施しているメインの人は60歳代が半分を占めていることがわかります。その中で、大都市、政令指定都市と東京23区に事務所がある団体では70歳代が多く、町村部に事務所がある団体は50歳代の人他に比べるとやや多いという傾向が見えてきました。いずれにしても、50～70歳代が中心の活動なので、この先5～10年経つとどうなるかわからないという不安があるのかなという傾向が見て取れます。

一方、企業等がCSRで行っている場合は当然、企業の社員が中心ですので、相対的に20～40歳代の割合が多くなるということが見えてきます。

要するに、森づくり活動においては40歳代以下はほぼまれということ。昨日のシンポジウムでは、若い人が集まっている事例が報告されて、それは非常に重要なのですが、一般に多くの団体は50歳代が若手なのです。60歳代になって一人前、70歳代以降でも十分活躍できるという傾向になっていますので、「若い人が欲しい」といって20～40歳代ばかりを狙うよりは、50歳代の人も重要だということが傾向として見えるのではないかと思います。

● 「企業や行政、地域との連携」「後継者育成と活動の継続」「新規参加者の獲得」が近年の課題に

このように見ていくことで、近年の森づくり活動の課題が見えてきました。これが今回のセミナーのテーマである「企業や行政、地域との連携」「後継者育成と活動の継続（世代交代・継承）」「新規参加者の獲得」ということになります。

また、詳しくは紹介しませんが、この他にも「資金集め」「資源・フィールドの活用」「地域活動への展開」「技術・

安全の確保」といったことも課題になっていることが分かりました。

この点については、調査を行った翌年である昨年度と今年度にかけて、定期的に活動をしている団体に聞き取り調査を行い、これらの課題を解決している団体の事例を調べています。今年度の分はまだまとまっていませんが、昨年度の結果は森づくりフォーラムのホームページに、報告書『森づくり活動の一步先を目指して』というタイトルで掲載されていますので、関心のある方は閲覧してみてください。

「実態調査」の課題と次回調査の方針（案）

ここからは、次回の調査をどうしたら良いかを考えてみたいと思います。

● 調査票の手直し

2015年までの調査では、1997年に作成した調査票をベースに、それをバージョンアップするかたちで進めてきました。それはそれで重要なことでもありますが、もとの調査票は、1997年時点の約300団体の動向を把握するためのもので、その目的は、森林整備の実態として量的にどれくらい行っているのかを把握することでした。また林野庁は、政策提言に向けて、どういう課題があり、どういう支援をしていったらよいかを活動団体に聞くという側面もありました。

しかし、1997年から状況は変わってきています。1つは、2010年代に入ると約3000団体が活動しているということで、活動団体数が約10倍になっているわけです。そうすると、300団体を調査していた時とは調査票の内容を変えていかなければなりません。具体的には、森林整備をメインとしている団体だけではなく、森林を利用した活動をしたいけれど、その中で森林整備も少し行っているような団体が増えています。昨日の事例報告でも、「森づくりから一番遠い人を選んで活動している」といった団体がありましたが、そういう団体も3000団体の中に入っているということを認識し、そういう団体にも答えてもらえるような調査票をつくる必要があるということです。

また、昨日は「活動メニューが増えてきている」という話もありました。そうすると、「今度はどう支援していったらよいか」という調査より、それぞれの団体がどういうビジョンを持って活動をしているかということに照らして、その中でどのような課題があるのかについて考えていけるような内容に変えていく必要があるということです。

● 2018 年度調査の方針

具体的にやるべきこととして、森づくり活動団体の定義を少し変えるということがあります。1997 年からずっと続いている調査ですから、その継続性は大切ですが、その継続性を担保した上で、活動の裾野が拡大している状況を視野に入れるということです。また、300 団体であれば一緒にまとめて分析できましたが、3000 団体もあると、その中には様々なタイプの活動団体があると考えられるので、類型化についても考える必要があります。

一方で、実はもう1つの課題として、調査票が答えづらいのではないかとことが挙げられます。もっと簡単に答えていただけるような調査票をつくらなければいけないと考えていますが、これについて技術的なこととなりますので、内容については省略したいと思います。

● 森づくり活動の近年の展開と裾野の広がりに対応

森づくり活動は、当初は都市住民による人工林あるいは里山の育林ボランティア、山主さんが使わなくなって放置された森林を手助けしようとするかたちで始まりましたが、現在はそこからどんどん展開し、裾野を広げています。

例えば、森林整備をしている団体の中でも、作業内容がどんどん高度化していて、資源搬出とか資源を活用している団体や、少数ですが主伐まで行っている団体まで出てきています。また、指定管理を受けたり、行政から業務委託を受けたり、企業の CSR 活動の支援を行ったりというかたちでも活動が広がっています。さらには、森づくり活動をしているのは都市住民に限らず、地域住民による活動も増えています。そして企業による社会貢献活動も浸透してきているのが近年の傾向となっています。

活動の裾野の広がりとしては、森林資源やフィールドを利用した活動や、街・地域づくりの一環として行われる市民の森づくり活動等が出てきています。もう少し視野を広げると、非営利の森づくり活動ではなく、営利的事業にどんどん接近してきていて、ソーシャルビジネス等を行ったり、バイオマス利用をしたり、自伐型林業をしたりといったこともあって、このような森づくり活動と仕事としての森林づくりの境界線が非常に曖昧、あるいは見えづらくなってきています。こうした部分も入れて質問事項を作成すると非常に複雑になるのですが、ソーシャルビジネスやバイオマス利用くらいまでは入れ込んだ調査票をつくったほうがよいのではと、個人的には考えています。

● 森づくり活動の定義の見直し

森づくり活動の定義というのは、従来は「非営利、自

発的に、目的とする森林を造成、維持するために、植え付け、下刈り、除伐、間伐、枝打ち等の作業を行うこと」とされていて、営利目的として行われる森づくり活動は除くということになっていました。これだと、森のようちえん活動の中で森林整備をするといったものは、森づくり活動には入ってこないことになります。

この定義を少し手直しして、森林資源・フィールドを活用し、一般市民に開かれた諸活動を森林内で行うための森林整備活動も対象に含めようと考えています。微妙な変化ではありますが、これによってもう少し網を広げていければよいのではないかと考えています。

つまり、これまで調査対象になっていたのは、ボランティア、NPO、任意団体による森林整備活動と、企業、協同組合、あるいは林研グループなどによる非営利の社会貢献活動を目的とした森林整備活動だったのですが、そこから少し範囲を広げて、森のようちえんとか自然学校的な活動をしている団体による、環境教育活動などの目的に付随して行われる森林整備活動も、森づくり活動に入れていくということが、今後重要になってくると考えられるわけです。主たる活動として森林整備活動を行っている団体だけではなく、従たる活動として森林整備を行っている団体もあるわけで、今後はこの傾向を抑えていく必要があると考えています。

また、活動団体タイプの検討、活動ビジョンや成果を尋ねる質問というものも考えていますが、この辺についても、調査に答えた経験や、「もっとこういうことを聞いてほしい」ということがあれば、ぜひご意見をいただければと思っています。次年度の調査は10月頃に行われる見込みですので、早い段階でフィードバックいただければありがたいと思います。

私からの報告は以上です。

森林ボランティアの未来

● 報告者

松村 正治

(NPO 法人よこはま里山研究所 理事長)



よこはま里山研究所 (NORA) の目的は里山保全を通して暮らしの質を高めること

今日のお題は「森林ボランティアの未来」ということですが、あまり森林ボランティアにこだわらないで話をしたいと思います。先程、富井さんから、「森林ボランティアという活動自体を、少し裾野を広げて見ていった方がよい」という話もありましたので、それを踏まえた話をしたいと思います。

まずは簡単に自己紹介させていただきます。私は、恵泉女学園大学というところで教員をしていて、コミュニティサービスラーニングという、ボランティア活動を通じた体験学習等を担当しています。また社会活動として、よこはま里山研究所の代表をしており、森づくりフォーラムが行っている“実態調査”の検討委員にもなっています。

まずは、私が代表を務めている、よこはま里山研究所(通称 NORA (ノラ))の活動を紹介したいと思います。NORA は 2000 年に設立し、2001 年に法人格を取得しています。全国に森林ボランティア、里山保全の団体がたくさんありますが、NORA は都市住民が中心となって活動を行っていますので、里山保全だけではなく、保全を通して私たちの暮らしの質を高めていくことを目的としています。会員数は 100 名程度で、私のような 40 歳～50 歳代が中心の団体です。

里山を民俗学的に捉えると、中心に集落があり(ムラ)、周りに田んぼや畑、沼があり(ノラ)、その周りに林野があり(ヤマ)、その先にオクヤマがあるかたちです。都市住民の場合、もちろんムラ、ノラ、ヤマの連続性は残っていないのですが、NORA は、ヤマ仕事やノラ仕事に出

かけ、ムラをつくり、非日常的なハレの日を楽しむ生き方をして、イキモノが豊かになるという事業に取り組んでいます。「ヤマ」「ノラ」「ムラ」「ハレ」「イキモノ」の中にそれぞれ個別の事業が入っていて、多いときで一月に 30 くらいの事業を行っています。具体的には、「ヤマ」として山仕事(森林・竹林の保全、木材の有効活用)、「ノラ」として野良仕事(農地の保全・活用)、「ムラ」としては「はまどま」というフリースペースを拠点としたコミュニティづくり(野菜の市や食事会、竹細工教室、土間仕事など)、「ハレ」としてイベント出展、そして「イキモノ」として里山探索や自然観察等を行っています。

都市の場合、ムラ、ノラ、ヤマで言うところと最初にヤマが荒れ始め、地主が管理をしなくなりました。次にノラが荒れてきて、都市農業も休耕地化していきます。そこをどうしていくかについて市民が参加して、市民自治を進めていく枠組みをつくっていかうとしているのが NORA というわけです。

森林ボランティアのこれまで

いまにつながる森林ボランティアや里山保全の市民運動は、首都圏を考えると 80 年代から始まっていると思います。90 年代には、例えば「第 1 回全国雑木林会議」や「第 1 回森林と市民をつなぐ全国の集い」が行われ、また全国的には「森づくりフォーラム」が、横浜には「よこはまの森フォーラム」ができるなど、ネットワーク団体ができはじめました。95 年はボランティア元年であったこともあって、90 年代は爆発的に広がっていったと言えます。それを支援するような、森林ボランティアや里山保全に関する本もさまざまに出版されました。

2000年代に入ると、例えば里山を保全するというのも国家戦略として位置づけられるようになりました。2010年に名古屋で開催された生物多様性条約COP10では、『里山イニシアチブ』ということで、世界にそうした姿勢を発信していますし、林野庁も森林ボランティア支援室を2003年に立ち上げ、2013年からは森林・山村多面的機能発揮対策交付金でボランティア団体の活動の支援が図られています。このように、2000年代になってからは、行政による支援や事業が進んできています。

ふりかえると、80年代に運動として始まり、90年代には全国に広まり、2000年代からは行政が後押ししてくれるようになったということです。

森林ボランティアのいま

●「メンバーの高齢化」といった課題が解決されない理由

先程の富井さんからの話にもありましたが、今日において森林ボランティア活動は、だんだんと縮小しているのではないかとされています。中には活動内容の多様化、高度化ということもあるのですが、「メンバーの高齢化」「スタッフの活動資金確保」といった課題は解決されておらず、課題として挙がり続けています。ここになにか問題があるのだと思います。

これらに対しては、いろいろな見方があります。例えば、活動団体が増えていないことに対しては、「本当にそれが問題なのか」という提起をしている方もいます。リーマンショックや東日本大震災以降は、都市生活の脆弱な暮らしよりも、地域に根差した農山村の仕事や暮らしをする人々が増えているのではないかとことです。地域おこし協力隊などの地方創生策の支援もあって、確かに田園回帰の兆しも見えています。90年代くらいまでであれば、森や山村というと森林ボランティアという入口しかなかったかもしれませんが、いまはいろいろな支援策があって、いろいろなやり方で入っていつているので、それはそれでよいのではないかと考え方もあります。

私は、それでもやはり、なにか解決できない理由があるのだと思います。その1つは、その課題がまだ深刻だと思われていなくて、解決に向けての団体の本気度が足りないということです。これでは、そのうち解決する体力がなくなってしまう、団体自体がなくなってしまう。2つ目は、行政などの活動支援策が、団体が抱える構造的な問題まで届いていないということです。活動に対しては支援されますが、それでは活動自体が目的化してしまい、

構造が変わっていくための支援にはなりません。3つ目は、世代交代したいと言っても、活動団体が若い人のニーズに合っていないのでは、ということなのです。

● ハードルを下げれば若い人たちも参加する

では、そうした課題に対してNORAがどのようなアプローチをしているかと言うと、例えば2012年からは「よこはま里山レンジャーズ」という事業を行っています。これは、自然環境復元協会という別のNPOと協力している活動で、いわゆるレンジャーというボランティア登録制度を持っています。約2200人がボランティア登録をしていますが、その人たちに「週末にここで自然環境を保全するボランティア活動がある」と発信すると、20～30歳代の方が多く集まってきます。ここで大事なことは、実は若い人たちは森に入りたくないわけではない、ボランティアをしたくないわけでもない、ということです。では、何で入ってこないかと言うと、高齢者ばかりいるグループに若い人が1人で入ることが、非常にハードルが高いのです。ならば、同じ思いをもってボランティア登録をしている人を10人まとめて連れていくことでハードルを下げてしま

42

おうということです。そのようにして、若い人たちが参加しやすい環境をつくっています。

このレンジャーズは、首都圏全域でのプロジェクトなのですが、私たちは横浜でのコーディネートを行っています。合計6つのエリアに年間通して12回ぐらい、レンジャーズの人たちを連れていっています。「週末にどこどこでボランティア活動がありますよ」とメールで伝え、10～15人で締め切って、その人たちに「日曜日にどこどこに来てください」と連絡をします。当日はボランティアリーダーがそこに来て、参加者を一緒にフィールドに連れて行って活動をします。一体感を出すため、ユニホームもつくりました。実際に参加してくるメンバーも比較的若い人が多いので、大切なのはハードルの低さだと思います。

この活動は、基本的に午前中で終了するようにしています。午後まで実施すると疲れてしまいますし、むしろ「もう少しやりたい」という気持ちを残して終わらせた方が、「また次も来たい」という気持ちになると思います。また若い人たちが来ると、地元のボランティアの方々が歓待して、「あれ食べろ、これ食べろ」というようになって疲れてしまい、その疲れが次の日の仕事等に影響してしまうので、ちょこっとボランティアをして気持ちよくなることを勧めています。

ただ、これだけだと物足りなくなってくる人もいますので、ボランティアリーダーを育てる育成講座も、スキルアップのために実施しています。これは、イギリスのリーダー養成プログラムを、日本環境保全ボランティアネットワークという団体が日本版にしたマニュアルを使ってやっています。

● ボランティアからシゴトへ

こうして若い人たちを入れて世代交代を図るべく取り組んでいるのですが、実は「あまり上手くいっていないのでは」と個人的に思っています。そうしたアプローチだけではダメだと言うことです。

3.11後の現在、もっぱら消費だけするのではなく、出来るものは自給して、手が届きにくい政治や経済に左右されないで自律的に仕事や暮らしをつくっていこうという動きは、田園だけではなく都市近郊でも強まっています。里山資本主義に代表されるような動きかもしれませんし、最近では森のようちえん、森林セラピー、フォレストアドベンチャー、獣害対策といったように、森林にこれまでの森林整備とは違うアプローチをしている人たちが増えています。また一部では、都市近郊で新規就農したり、新しい森林環境教育で起業した人たち、あるいは週末マルシェ

のように手づくりしたものを販売するといった活動をする人も増えていて、自分たちのスキル、手元にある素材を活かして、それを仕事につなげています。

そういうことを踏まえて、最近はボランティアの世代交代ということだけではなくて、ボランティアからシゴトへというアプローチも行っています。

都市近郊、特に多摩丘陵では、優れた里山の多くは公的な緑地保全制度の中に置かれています。そこではボランティアの活動が推奨されるのですが、若い人たちがずっとボランティアだけでやっていけるかという、将来が不透明な現代では無理だろうと考えています。環境意識がとても高くても、ボランティア活動だけでは続きません。何かしらの小遣い稼ぎでもいいので、それをシゴトにつなげていくことを少し考えていかなければならないと思っています。

もう1つ、最近はNPOというスタイルではなく、株式会社とか一般社団といった法人格を選ぶところも増えてきています。それは、シゴトということをはっきりイメージしているからです。

● 公から民へ

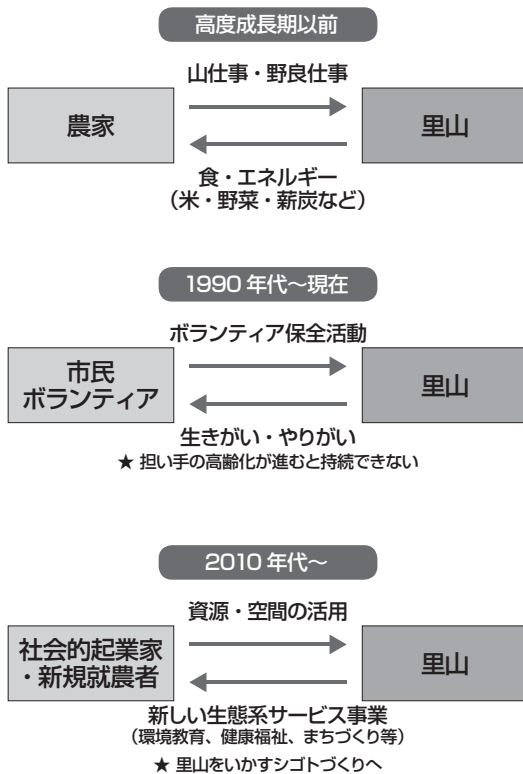
そう考えていくと、行政との連携も大切になっていくのですが、公的な制度の下では「火や刃物は使ってはいけません」とか言われてしまいます。これは里山文化を継承する上で大きな制約になります。

民有地であれば、自然学校、森のようちえん、製材加工、木工品の販売なども可能になりますので、最近私たちは、行政との連携を少し遠のけて、役所が管轄する公有地での活動から有志による信頼ベースの民有地での活動へとシフトしてきています。

森林ボランティアのこれから

これまでの話を少し整理すると、人々と里山、森との関係は、例えば高度成長期の前であれば、農家が里山にヤマ仕事、ノラ仕事で手入れをして食やエネルギーを得ていたという時代があり、90年代は、それに市民ボランティアが入ってきて「生きがい」「やりがい」を得てきた時代です。けれど、これは担い手の高齢化が進むと持続できません。そこで近年は、社会的起業家や新規就農者がそこに入ってきて、新しい生態系サービス事業を行う環境教育や健康福祉、街づくりなどの新しいビジネスを展開してきている、ということです。

図 人々と里山の関係



● 「シゴトづくり」のフレーズがキャッチーな時代に

2016年1月、「まちの近くで里山をいかすシゴトづくり」というキャッチフレーズでワークショップを行いました。水曜日に2週続けて行ったのですが、おかげさまで延べ140名の方々が集まりました。このフレーズが非常にキャッチーであり、関心があることがわかったので、早速プロジェクトチームをつくり、現在は100人ぐらいの方々が参加しています。いま、時代は会社から個人、組織からチーム、所有からシェアという形態になっています。このプロジェクトチームは、その中で里山の資源や空間を活用した社会的起業を支援するプラットフォームづくりを目指しています。

いま、私がシゴトづくりのために取り組んでいるのは、人々のネットワークづくり、活動を支える理念づくり、人と情報が集まるサイトづくりです。例えば、1月には「まちの近くの里山をいかすシゴトづくりフォーラム」というかたちで、ツリークライミング、森のようちえん等に取り組んでいる方々に来ていただきました。最近の方々は、「森と踊る株式会社」とか「原っぱ大学」とか、ネーミングからして違います。つまり、ターゲットが違ってきているのです。

また、例えば「自然体験・環境教育」といったテーマを決めて実践者の人たちに集まってもらい、ゼミナール形式で実際に皆さんが取り組んでいることを話してもらったりしています。このゼミナールをこれまで3回実施して思ったことは、「こうしたことで専業で食べていくには、まだまだハードルが高いな」ということです。

一方で、仕事観やワークライフバランスを考えれば、すでに取り組んでいる人もたくさんいます。「年収300万円でも、パートナーと一緒になんとか食べている」と言う人もいます。これは仕事観の違いです。「いくらもらえなければ仕事じゃない」というのも「一人で稼がなければいけない」というのも、仕事観の違いです。また、つくることを楽しんで支出の少ない暮らしをしていくことを目指すのであれば、一番気持ちよく暮らしていける収入と支出のバランスをどうすればよいかといった選択ができる時代になってきているということです。

ここまでお話ししてきたような私の思っていることや、多摩丘陵で行っていること等を発信するためにWebサイト『里山コネクト』もつくりました。こちらも参加している人は若い方が多いです。

● やりたいこと、出来ること、必要となれることのバランスが大事

こうした動きは、森林ボランティアだけをターゲットにしたら非常にもったいないと思います。森林の近くにある田んぼや畑を活用したいとか、エネルギーを自給したいという人もいるし、マルシェに参加したいという人もいます。そういう人たちもターゲットになると思います。また、ボランティアだと外れてしまうところも、シゴトであれば一緒に取り組めますという人もいます。森林とボランティアを掛け合わせてターゲットを狭めてしまうのではなく、むしろつなげて広げていったほうがよいと思います。

また昨日の話でもありましたが、いろいろな人を取り込もうと思うと、敷居を下げたりとか楽しさを前面に出す必要がありますが、一方で、社会貢献・環境貢献をしたいという気持ちは確かにあると思います。敷居の低さ、間口の広さといった、いろいろな方向から関わってもらえるようにすることが、新しい人を取り込むチャンスになるのは間違いありませんが、そうすると、その団体の中心となる価値とはなんだ、という問題も出てくるでしょう。団体の中でいろいろと議論しながら、これまで守ってきた価値や文化があるはずで、それを新しい人たちとどうやって共有していくのか。もちろんこれも、バランスが必要なのだと思います。



また、多くの人が自発的に参加するということがボランティア団体の良いところだと思いますが、一方で、そればかりをずっとやっているとシゴトにつながる専門性をどうやって身につけていくのか、という面もあります。ボランティアコーディネーターも非常に大事な専門性ではありますが、では森林ボランティアの専門性というのはなんですか。私たちは、あたり前のように自分を「普通の人たち」だと思っていますが、他の人たちからは、ボランティアをする人たちを怪しい人と見られることも少なくありません。だからこそ、「私たちには、こういう専門性があります」ということを、客観的に説明できた方がよいと思うのです。

昨日は連携の話もありましたが、もちろん連携は非常に大事ですし、活動の幅を広げてくれます。その一方で、いままでであれば団体の中でツアーで通じていたものを、説明をしなければいけなくなるわけです。特に、助成をいただいている場合などは、領収書等のこまごまとした資料を出さなければならなくなります。その付き合い方もバランスだと思います。やりたいこと (want)、出来ること (can)、必要となれること (need) のバランスです。

結局、やはり正解はないと思います。だからこそ、どこかで私たちはそれぞれ、決断をしなければいけないし、

決断したことをしっかりと覚えておく必要があります。決断するということは、そこに飛躍があるのです。だから、成功も失敗もします。苦しくなったら、やり直せばよいのです。

● 森林ボランティアの価値は
これからの時代を生き抜く力を培えること

最後に、森林ボランティアの未来ですが、私は森林ボランティアに非常に可能性を感じています。特に若い人たち、学生たちとつきあっていく中で思うこととして、彼らには未来が見通せません。昔のように経済が成長し続け、収入が右肩上がりになって上がっていくことは、もうないと思います。そのような不透明な未来を生きていくためには、森林ボランティア活動を通して培われる力が生きてくると思います。

私たちの社会ではこれまで、お金を稼ぐ力をずっと身につけようとしてきました。しかし、それだけでは社会が十分に安定することはなくて、やはり環境をつくる力、社会をつくる力が大切なのだと思います。では、それをどこで学ぶのかということですが、私自身は、森林ボランティア活動で身につけさせてもらったと思っています。そして、それさえあれば、実はこれからの不安定な世の中がどうなろうと、おそらく生きていけるだろうと思います。それこそが、森林ボランティアの大きな価値だと思います。

テーマ別セッショントーク

～躍動する団体に共通するポテンシャルとは!?～

テーマ ①

次世代に継ぐ森林づくりのための 「企業・行政・地域との連携」

● ファシリテーター & 話題提供

丹羽 健司

(森の健康診断出前隊 代表)

● 今日の分科会は婚活みたいなもの

第1分科会は、「企業・行政・地域との連携」がテーマでした。

まず、傍聴を含めると20人、発言者は15名の方たちに、それぞれ自己紹介を兼ねて「ドヤ!」という自慢を言ってもらいました。それから「トホホ」の悩み、課題を聞くというかたちで、それぞれお話ししていただきました。特に課題については、私たちのグループでは、行政とNGOのどちらもいましたから「2人合わせれば、それで終わりだな」ということで(笑)。

「行政がやってくれない」「行政はやろうとするのだけれど、市民がついてこない」といった情報にも偏在があ

る中で、行政からみたら市民はどういうふうに見えるのか。例えば頑固な団体に見えたり、「市民からは見放されちゃっているかな」という思いがあったり、いろいろあって、取っ付きが上手くいかない。だから今日の分科会は、「婚活みたいなものだよ」ということから始まりました。

「なにを求めているのか」という話を聞いていくと、お金とか人材とか、いろんな要望が出てくるのだけれど、今回は特に行政に特化した話になりました。

● 「危ない公務員」を探す嗅覚が大事

私はそのファシリテーターとして、本当は一番ふさわしくないのかもしれませんが、なぜかという、行政に期待していないから。「行政は後からついてくるものだ」とずっと思ってやってきて、事実、行政は後からついてきました。そういう感覚があるから、実はこの90分間、違和感がずっとありました。

私は「陳情型なんでもっての他」と思っています。「それよりも、危ない公務員、怪しい匂いのする公務員を役場の中で探して歩いた方がええぞ」ということで、私もそうしてきました。行政とつるむときは、危ない公務員とつるみました。それって案外重要な部分で、その嗅覚がすごく大事です。「ブツブツ言いながら役所の中を歩き回ると、いつか誰かが引っかかってくる」と私はいままでもよく言ってきました。そこに引っかかってくるころから突破口を開いて、どこの役場にもいる怪しい人たちがつながってくると面白く



丹羽 健司さん (全体共有にて)

なる、ということがすごくありました。

- 行政区域を越えた広域で情報を交換することで
突破口は開けるのではないか

いろいろと課題はあって、行政はやってくれないと同時に、行政はやろうとしてもなかなか動かない等々があります。

でも、私たちの課題は「それって行政の問題なの？」とも思います。もちろん、お金と人材は欲しいけれど、それは行政に言うことではないような気もしました。実は研究者の方たちも縦割り行政の中で悩んでいるということもあります。

それならば「混ぜると危険」じゃないけれども、多様な人、全然違う分野の人がくっついて話を進めていけば、上手くいくのではないかと私は思います。地域を越えて、私たちの場合は流域と言っていますが、県と市町村の境界をすっとばして動いていくと、行政間が比較されるのを嫌う、あるいは怖がる部分もあります。それを見る面白さもあるのだけれど、より広域な市町村や県を跨いだ集まりをつくっていく中で出会いが出来て、情報が出来ていき

ます。「比べられることを嫌うならば、もっと比べてみよう。行政の対応の森の健康診断をやればいい」といったような話でもでした。

それから他業種間、研究者の話もそうだし、学校教育と森林ボランティア活動を混ぜたりとか、要するに、役場からすると分野の違うモノを混ぜることで、逆に前に進むかもしれないといった話も出ました。

- いろんな取り組み事例を共有し交換し合う中に
連携の答えはある

要は、県や市町村といった行政管轄を越えて動いていく中で突破口が開けるのではないか、その会合を自分らの住む地域より広い地域の中で行っていくことで、ノウハウは交換できるのではないかというのが、私たちの中の議論の1つでした。

連携についての答えなんかどこにもありません。それでもいろいろな取り組み事例を共有し、交換し合うところで本当の答えがあるのかなと思いました。



テーマ別セッショントーク

～躍動する団体に共通するポテンシャルとは!?～

テーマ ②

次世代に継ぐ森林づくりのための

「後継者育成と継続的な取り組み」

● ファシリテーター

鹿住 貴之

(認定 NPO 法人 JUON(樹恩) NETWORK 事務局長)

● 話題提供

松崎 和敬

(NPO 法人 いわきの森に親しむ会 副理事長)

テーマ②は 20 名くらいの方にご参加いただきました。

進め方としては、まず、いわきの森に親しむ会の松崎さんにご報告いただき、その後にキーワードをちょっと共有してから、後継者育成に関心のあるグループ、継続的な活動に関心があるグループに分かれました。ホワイトボードの、向かって左側半分は「後継者育成」に関するポイント、右半分が「継続的な取り組み」に関するポイントです。

● 「権限の譲渡」「ステップアップの仕組み」が後継者育成を意識したときのポイント

後継者を育成しようということであれば「価値観を押しつけない」。中には「押し付けた方がいい」という方もいましたが、分散してグループごとに活動していけばいいという中では、それも1つかなと思います。そうなる、と「組織として団体のビジョンは崩さない」というところとのバランスがポイントになるのかなと思います。

それと「居場所を見つけてもらう」「活動の場を教育的な場に」とか、黙っていても後継者は出てこない。「やってみない?」と声をかけることも必要なことだな、と。「やらないとまずいぞ」という脅しもあっていろいろですが、「期待はし過ぎない」ということです。昨日のパネルディスカッションで宮本さんがまとめられていましたけれど、「権限を委譲する」とか、昨日発表された女性お三方の事例でいうと、活動から運営者サイドに巻き込んでいく「ステップアップの仕組み」などが、後継者育成を強く意識した時のポイントとして出てきました。

● 常に新しい取り組みへのチャレンジを

「継続的な取り組み」について、「地域のニーズに対応する」というのはそもそも論で、山主さんの意向などもあ

りますし、あとは活動資金の問題ですね。それと1つのプロジェクトとしては「ゴールや期限を決め、一旦辞めてもいい」じゃないかと。昨日、寺川さんはスクラップ&ビルドという言い方をしていましたが、そういう見直しも必要でしょう。また、参加してくる人たちが、「楽しいと実感できる活動」「やりたいことを確認」「やりたいことを実現するグループをつくっていく」「“学べる”をプラスする」といったことで自己実現できる場というのが、昨日のキーワードだったかなと思います。

それと昨日の寺川さんのお話では、「独立採算制のグループ化をしてそれぞれの中で運営し、新しいことにどんどんチャレンジすることで、新しい関係性や刺激が生まれる。そういうところで新しい人が入ったり、時代に対応したような活動が出てくる」ということでした。継続的な取り組みとしては、1つのことをずっとやることも大切ですが、いろんなことにチャレンジしていくことが特に重要なのではないかと感じました。

● 外に向いての発信、連携もポイント

また、いわきの森に親しむ会の事例からは、段階に応じて活動を広げていくという事例を教えてくださいました。最初は自然観察から始まり、「そのためにはフィールドを整備しなくちゃ」ということで山仕事を始め、そうすると「山には来たいけれど山仕事に向いてない人」ができて、それならばと畑をはじめたといったお話で、こうした「段階に応じた活動の発展」ということもポイントなのかなと思いました。

また、いわきの森に親しむ会は、「森の学校」に指定されて「ろうきん」から資金提供を受けることになるのですが、それは、活動を閉じてないで外に向かって発信し、新しいことにチャレンジしてきたことが、そういうことに

結びついたのかなと思いました。

あと、いわきの森に親しむ会もかなり高齢化が進んでいるのですが、若い団体と連携したりしています。外との連携というのもポイントだったと思います。

● 技術や職人の伝承も課題

今回のテーマは、後継者とか組織とか活動の伝承だったのですが、技術の伝承、職人の伝承ということも課題で、これはこれで考えなければいけないという話もありました。それと、もう子どもの世代は難しいから、孫の世代にカッコイイおじいちゃんの姿を見せようという「カッコイイおじいちゃんプロジェクト」をやったらどうかという意見もありました。

● 考慮しなければならない課題も多様

グループに分かれてからは、自分たちが抱えている課題について具体的に「明日からなにができるか」を考えてワークしていただきました。その中で、「やっぱり人と資金の確保が大切」ということ、また学生の団体の方も参加していたのですが、「学生は4年で変わるので、またちょっと違う事情がある」とか、山も成長して主伐期に入ってきたり、広葉樹も15年サイクルで伐れるようになってきたりといった、「木の成長によっての活動展開も課題

になってくる」といった意見もでていて、継続した活動を考える上で、考慮しなければならないこともいろいろあるということです。また、「活動に参加する人は多いけれど、リーダーをやる人は少ない」というのは、どこの団体でも抱えている問題だと思いますが、そういうことも出まして、そうしたことをポイントにしてから、これからも考えていこうということをお話ししました。

● 後継者育成と取り組みの継続が目的ではなく、あくまで、そのフィールドが保全されることが大切

最後に、今回は「後継者育成と継続的な取り組み」がテーマでしたが、もちろんそれは一生懸命頑張るにしても、そのことが団体の目的ではありません。あくまでも大切なのは、そのフィールドがちゃんと守られていくことであり、その活動を待っている子どもがいるとか、そういう意味でのフィールド、活動の継続が大切なのです。

ですから、もしどうしても組織が継続できないのであれば、もうやめちゃってもいいんじゃないのか、フィールドと活動が継続されるようなつながりができれば、自分たちの後継者育成や継続的な取り組みは無理しなくてもいいのではないかと、ということもあるでしょう。そんなことで、皆さんで少し気が楽になったところで、一生懸命頑張って取り組んでいこうということで終わりました。



鹿住 貴之さん (全体共有にて)

テーマ別セッショントーク

～躍動する団体に共通するポテンシャルとは!?～

テーマ ③

次世代に継ぐ森林づくりのための 「新規参加者を獲得するためのポイント」

● ファシリテーター

松村 正治

(NPO 法人よこはま里山研究所 理事長)

● 話題提供

小島 圭二

(多摩の森・大自然塾 鳩の巣協議会)

● 森林側とニーズが上手く結びついていない

テーマ③は、「新規参加者を獲得するためのポイント」ということで、最初に鳩の巣協議会の小島さんから話題提供をしていただきました。

小島さんからは最後のまとめとして、広報や告知が多様化しているということで、「特に若い人に向けてなにか発信する時には、若い人たちに届くような広報が必要だ」とか、「行政の技術講座などが入口になっているので、これはとても助かっている」といったお話もありました。

その上で、集まってくださった皆さんからいろんな課題を出してもらったのですが、「いろんな自治体で森林ボランティアを育成する講座はあるけれども、どこも最近定員割れが起こったり、人が集まらなかったり」という話がありました。一方で、「例えば自己実現だとか、森と関わるニーズは意外に高まっているじゃないか」という話もあって、それらが上手く結びついていない可能性についての指摘がありました。

● 獲得したい人たちがなにを求めているのかを知り

そこに届くコミュニケーションやツールを持つ

結局、新規参加者を獲得したいという場合、獲得したい人たちに届くようなコミュニケーションやツールを持っているか、そして、その人たちが一体何を求めているかを知る必要があるということに尽きる、ということです。

例えば、若い人たちに来てほしいって言っても、若い人たちはいま忙しくて、留学にも行きたい、インターシップにも行きたい、ボランティアもしたいのです。そんな若い人が、ボランティアで何を身につけたいのか、何を学びたいのか、何を得たいのかについて、なにも分からないままに「来てください」と言っても、1度は来て

くれるかもしれませんが、すぐに他のところへ行ってしまいます。留学で身につくものに比べて、ボランティア体験ではどんな成長ができるのか、それについて語る言葉がなければ、またその体験が響かなければ、新規参加者の獲得といっても無理なのだろうなって思いました。

20代の初めの頃は、本当に忙しくてなかなか参加できないけれど、20代後半～30代くらいからだ、自分がどうやって生きていくのかを考えるようになります。そういう人たちが、自己実現とかを考え始めるわけです。

そういったニーズは広がってきています。そういう人たちは、実は森林ボランティアをいままで支えてきた層とスキルのにはあまり変わりません。むしろ、目指していること自体はもっと広がってきているのかもしれない。森だけではなく、農作業もしたい、海での暮らしもしたいといった人たちがいて、そういう人たちは潜在的に増えてきていると思います。これだけ社会が不安定になっていて、3.11も経験してきている中であって、森林ボランティアで身に付けられるいろんなスキルや、そこで出会う仲間、ものすごい財産のはずなのですが、そのポテンシャルを上手く活かさきれていないような気がします。

● 獲得したい人たちにマッチしたデザインも必要

それができなければ、できる人に頼もう

そういう人たちがなにを求めているかをちゃんと捕まえて、その人たちに届けられるコミュニケーションツールを持っているか、問題ないのかもしれない。しかし、あいにく私たちは、例えばチラシをつくるにしても相変わらず Word で、MS 明朝を使っているの、そういう人たちが、いいねって思うデザインではないわけです。そういうところは、あらためなければならぬでしょう。同じ情報であっても、目で見て「これは私たちが求めているもの

じゃない」と思われてしまうんです。それはつまり、デザインが違うんです。だからチラシについても、あるいは広報についても、使う写真についても、いまそういう人たちがターゲットにしているところは、写真も専門の人が撮っています。小島さんの話だと、ボランティアの中には「そういう写真撮影をして、広報のお手伝いをしたい」というボランティアもいるそうです。話題提供の際にお話したWebサイトも、実は、コミュニケーションのお手伝いをするプロボノの人とつくったので、予算は全然かかっていません。そんな奇特な人もいます。

新規参加者を獲得しようと思うならば、自分たちが普段慣れ親しんでないような人たちの生活の実感だとか、コミュニケーションの仕方にも触れていかなくてはいけないわけです。そこに思い切って入っていくか、入っていくのが自分で苦手なら、入っていくのが得意な人たち、当たり前のように写真を撮ってパパッとSNSにあげてしまう人たちがいるわけだから、そういう人と仲良くなってしまう、というやり方の方がいいのだろうと思います。

● 新規参加者を獲得するという事は
 自らの枠を超えていくことへのチャレンジ

森づくりにこだわらないという話もありました。いまま

で森林ボランティアは施業中心で、森づくりをコツコツやってきて、それはすごく大事なことです。しかし、そのつくった森をどうするのか、先のことをあまり考えていません。むしろキレイになった森で遊びたいとか、子育てさせたいといったニーズはたくさんあるわけだから、そういう人たちと本当はもっと一緒になってやれたらいいですよ。そういうアイデアが森に持ち込まれることによって、いままで真面目にコツコツやってきた人たちが、違った人たちにとって魅力的になったりするかもしれません。その新しい人が、また新しい人を連れてくることもあるので、そういう意味では、自分のカルチャーを越えていく、自分の枠を超えていくということ、それ自体が楽しめないといけいけいではないのでしょうか。

確かにニーズに応えることばかりやっていると、自分たちのやりたいことではなくなっていくかもしれませんが、ボランティアの人たちがやりたいことには、社会的ニーズが本当にあるのでしょうか。本当に新規参加者を獲得しようと思うなら、まず、新しい人に会うことを楽しいと思わないといけいけいし、それも自分の慣れ親しんだところを少し越えて新しくチャレンジしていくことが必要なのかなと思います。

ディスカッションを進めて、そんなふうに感じました。



松村 正治さん (全体共有にて)

閉会挨拶

松井 一郎 (NPO 法人森づくりフォーラム 理事)



皆さん、2日間にわたってご苦労さまでした。「緑のボランティア活動助成セミナー」は久しぶりの開催ですから、私みたいな古い人間は同窓会に来ているような感じで、久しぶりの方とたくさんお会いすることができました。

●
こうして久しぶりにお会いしてみると、皆さんの話題や考え方が少し時代と共にずいぶん変わってきているのかなと感じました。昔は森林整備、要するに森づくり、山仕事というところがボランティアの延長線上にあったのですが、いまでは森林整備からその周辺に関わるようになり、その周辺がどんどん広がりつつあるような気がしています。

こういう機会から、みんながどこかで森と関わる、まさに国民参加の森林づくりという時代になってくれればいいかなと思います。また、森づくりフォーラムは、「森と共に暮らす社会」をめざして」と標榜していますので、そういう意味でも、より良い社会になってきているのではないのかと思っています。しかし、その実現のためには、「緑の募金」が非常に重要だと思いますので、ぜひ皆様方も地域に帰ったら、募金活動にぜひご協力をいただけたらと思っています。

●
今回こういう風な機会をいただいた国土緑化推進機構、登壇者の皆様、それから運営を担っていただいたエスピー、ファームの皆様、ご参加いただいた皆様に深く、厚く感謝する次第です。ありがとうございました。

関係者名簿

● 主催

公益社団法人 国土緑化推進機構

専務理事	梶谷 辰哉
常務理事	青木 正篤
募金企画部長	日高 瑞記
募金業務部長	井上 達也
募金部	箕輪 和香奈
募金部	和田 幹夫
政策企画部	富永 茂

● 共催 (17日のみ共催 / H29年度林野庁補助事業)

NPO 法人森づくりフォーラム

理事	松井 一郎
理事	石山 恵子
広報	中沢 和彦
事務局	宮本 至
事務局	石井 春花

● 運営協力

株式会社 エス・ピー・ファーム

代表取締役	近藤 修一
チーフディレクター	佐藤 佑輔
	田中 和樹
	新妻 薫

緑のボランティア活動 助成セミナー 2018



緑の募金

報告書

発行日：2018年4月27日

発行：公益社団法人 国土緑化推進機構

〒102-0093 東京都千代田区平河町2-7-4 砂防会館別館（B棟5階）

TEL：03-3262-8457 FAX：03-3264-3974

編集：株式会社 エス・ピー・ファーム

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町2-14 KT小川町ビル4階

TEL：03-5283-6531 FAX：03-5281-5501

印刷：藤木出版株式会社